

テハ被告人ノ一身上ニ存セシ所ノ不利トナル可キ疑團消散スル者ナリ○又被告人實ニ其所爲ノ本人タルモ刑法ニ循ヒ(刑法草案第一篇第四章)刑ヲ免ル可キイホテリス設例ヲ引用スル時モ亦此場合ト同一タリ

第三 被告人ニ對シ刑ヲ科ス可キノ要件ヲ具有スト雖モ判事或ハ公訴ノ受理ス可カラサルヲ認メ(例之ハ法律上豫メ訴ヲ希望スル時其訴ノ無キカ如シ)或ハ起訴ノ時ニ方リ期滿免除アリタルニ由リ或ハ大赦又ハ廢棄ス可カラサル者トナリタル裁決アリタルニ由リアムニステ即チ公訴消滅シタルヲ認定シタル場合

若シ被告人豫審中死去セシ時ハ免訴ノ言渡ヲ爲スチ必要トセス何トナレハ此場合ニ於テ豫審ヲ終結スルハ判事ノ所爲ト云ハンヨリ寧ロ法律上ノ所爲ト云フ可ケレハナリ○判事ハ被告人死去シタル旨チ一件書類ニ記載ス可シ而シテ他ノ被告人ナキニ於テハ其事件

全ク終結シタル者トス

免訴ノ言渡ノ利益ヲ受ケタル被告人若シ既ニ拘留ヲ受ケタル者ニシテ而シテ他ノ事件ニ附キ拘留ヲ受ケタルニ非サル時ハ速ニ之ヲ釋放ス可シ

然レモ第二百五十一條ニ於テ檢察官ニ允許シタル故障ヲ述フル權利ヲ豫知スルヲ以テ二十四時ノ間ハ猶ホ其被告人ヲ留置ク可シ斯ク免訴ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ其同一ノ事件ニ附キ更ニ訴ヲ受クルヲ免カレタル者ニ非ス○蓋シ其訴ヘタル次章ニ於テ見ルカ如ク判事ノ言渡ニ對シテ故障若クハ控訴ノ手續ヲ以テ更ニ之ヲ行フヲ得ルナリ○又豫審判事ハ其發見シタル證據ニ附テ而已其如何チ審判スル者ナルヲ以テ假令ヒ上訴ノ手續ヲ行ヒ盡シタル後ト雖モ同一ノ被告人ニ對シ更ニ證據ノ生シタル時ハ亦新タナル

訴ヲ起スヲ得○此場合ハ第三百條ニ之ヲ規定ス

第二百四十四條

〔第三百五十一號〕 訴訟ノ由テ起リタル所ノ事件至輕ノ罪即チ違警罪ナルヲアル可シ○是レ因ヨリ豫審ヲ行フ可キ者ニ非スト雖モ最初告訴、告發又ハ現行犯罪ノ皮相ニ就キ其犯罪ヲ重劇ナラシメタルニ由リ豫審ヲ行ヒタルナリ○斯ノ如ク犯罪ノ事實ニ對シテ其眞實ノ性質ヲ付與スルハ是レ豫審ノ最モ貴重ナル利益中ノ一ナリ○故ニ判事違警罪ト認メタルニ於テハ被告人ヲ違警罪裁判所ニ送致シ且ツ既ニ拘留セラル、時ハ則チ之ヲ單純ニ解シ可シ

第二百四十五條

〔第三百五十二號ノ四〕 豫審判事其命令書中ニ舉ケタル第四ノ論結ハ即チ輕罪裁判所ニ送致ス可キ犯罪ノ存在ヲ認メシヲ想像ス○

然レモ茲ニ釋放ニ關シテハ二三ノ區別ヲ爲スヲ要ス

若シ其輕罪管ニ罰金而已チ惹起スルニ過キサル時ハ當然釋放シ又ハ既ニ釋放ヲ與ヘシ時ハ之ヲ其儘ニ保持ス可シ而シテ此釋放ハ假リノ者ニ非スシテ單純ノ者トス
若シ其輕罪禁錮ニ該ル可キ者ナレハ釋放ハ假リニ非サレハ之ヲ行フヲ得ス而シテ判事ハ事件ノ輕重及ヒ被告人ノ地位ニ循ヒ假釋ヲ與ヘ又ハ之ヲ拒絕シ及ヒ假釋ヲ與フルニ保證ヲナサシムルト否トノ權アリ

此場合ニ於テハ假令ヒ保證ヲ立ルヲナキモ其釋放ノ性質單純ニアラスシテ假釋タルヲハ即チ被告人出頭ス可キノ義務ト是カ爲メ書記局ニ於テ盟約ヲ爲ス可キ義務アルヲ以テ自カラ了知ス可キ者トス
若シ被告人嘗テ拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケシヲ無ケレハ判事則チ其

中ノ一令狀ヲ發シ然ル後チ被告人ヲシテ出頭ス可キノ盟約ヲ爲サシメタル上コテ假釋ノ命令ヲ與フ可シ此式ヲ踐テ猶ホ被告人出頭セサル時ハ直ニ之ヲ捕獲スルヲ得

拘留狀ハ第四百四十一條ニ循ヒ有期ニシテ且ツ太々制限セラレタルモ法律ハ之ニ拘ラス茲ニ之ヲ發スルヲ許シタリ蓋シ假釋アリタル時ハ拘留狀モ十日以上ハ勿論二十日以上ト雖モ尙ホ繼續スルヲ得レハナリ

拘留狀ヲ收監狀ニ改ム可キハ唯被告人公判ヲ受ルノ前假釋ノ利益ヲ失フタル時ニ限レリ

第二百四十六條

〔第三百五十三號ノ五〕 若シ被告事件重罪ナリト思料セラレ、時ハ豫審判事ハ重罪被告人ヲ重罪審院又ハ會審院ニ送致ス可シ
クールのグワツシズ

此場合ニ於テハ假釋ヲ與フルヲ得ス故ニ若シ之ヲ與ヘ置キシ時ハ之ヲ止メ而シテ保證金ヲ返還セシムルヲ要ス

日本草案ハ此點ニ附キ太々著大ニ佛蘭西法典ト異ル所アリ

佛蘭西ニ於テハ豫審判事直ニ重罪被告人ヲ會審院ニ送致セスシテ控訴院ノ一局ニ送り其局ニ於テハ重罪ニ處ス可キヤ否即チ會審院ニ送致ス可キヤ否ヲ審判セリ
ミースマン、アツキコサシヨ

日本ニ於テハ否ラス即チ豫審判事ハ即時且ツ直接ニ重罪審院ニ送

致ス可キ旨ノ命令ヲ爲ス可シ但シ或ル場合ニ於テ或ハ被告人或ハ

檢察官若クハ又民事原告人等其權ヲ以テ故障又ハ控訴ヲ爲スハ此

限ニ在ラス(看第二百七十四條乃至第二百七十六條)

若シ是等ノ上訴モアラサル時ハ被告事件ヲ重罪審院ニ送致シテ其効アリ

上訴中ハ被告人ヲ監獄ニ拘留ス可シ

右二箇國ノ法律ニ存スル所ノ差異ハ之ヲ實際ニ附キ考フルニ或ハ著大ナラサルコトアリ

乃チ被告人多クハ豫審判事ノ言渡ニ對シ控訴ヲ爲ス可キニ由ル然レニ控訴ヲ爲スノ前其裁判所ノ判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可シ故ニ其故障ヲ述ヘ而シテ之ニ敗訴セルヲ以テ更ニ上訴ヲ爲サ、ルコトモ亦往々之レ有リ

我草案ニ此新規則ヲ設ケタル理由ニアリ第一、我國ニ於テハ控訴院ノ數僅少ニシテ且ツ彼我遠隔セリ是ヲ以テ總テ送致ノ言渡ハ必ス之ヲ控訴院ノ審判ニ附ス可シト定ムルニ於テハ爲メニ重罪裁判ノ事務ヲ稽留セシムルコト勿論ナリ第二、控訴院ハ豫審ニ對スル控訴ニ附キ決定スルノ職ニ在ル可キヲ以テ訴訟關係人ノ一人ノ控訴ヲ起

スヲ待タス當然之ニ干涉スルノ道理ナシ

第二百四十六條ノ二

〔第三百五十四號〕 本條(看附言)ノ目的ハ豫審判事ノ遭遇シ得可キ數種ノ設例ヲ完全スルニ在リ○本條ハ第三十九條ニ掲ケタル管轄ノ總則ヨリ來ル所ナリ

〔附言〕 本條ヲ草案ニ加ヘタルハツイ此頃ノ事タリ故ニ之ヲ第二百四十六條ノ二ト爲ス

若シ附帶ノ犯罪アル時ハ最高ノ法廳ノ一ニ之ヲ送致ス可シ(第六百九條第七百八十三號中ノ附言ヲ看ヨ)○若シ犯罪附帶ニ非サル時ハ判事其送致ヲ分別シ若シハ合集スルコトヲ得

第二百四十七條

〔第三百五十五號〕 被告人ヲ明確ニ指定スルノ事ハ緊要ノ命令ニハ

概子皆ナ之ヲ爲スナリ唯、玆ニハ其辯明、説明等ヲ要スルヲナシ何トナレハ法律ハ令狀ノ場合ニ於テ既ニ此事項ヲ述ヘ置キタルヲ以テ即チ之ニ讓リタレハナリ(第四百四十四條)

第二百四十八條

[第三百五十六號] 豫審終結ノ命令ハ前既ニ述ヘタルノ外尙ホ玆ニ裁判言渡ニ類似スル者ヲ示セリ即チ事實上ト法律上トニ於テ命令ニ理由ヲ附スルヲ是ナリ其事實上ノ理由ヲ附スルハ即チ如何ナル犯罪ノ上ニ判事其審判ヲ下セシカ又其犯罪ハ如何ナル特別ノ景狀ヲ提出セシカヲ認ムルカ爲メナリ判事ハ則チ事實ヲ明瞭ニ指示シ以テ己レカ決定ノ正當ナルヲ及ヒ其法律ニ適スルヲチ證明ス可キナリ法律上ノ理由ヲ附スルハ即チ判事ノ決定ハ裁判權ニ服從ス可キ者ノ眼ニ見ル處ニ於テ眞正ニシテ其專恣ナラサルヲ見セシムル

カ爲メナリ

判事ノ此二箇ノ義務ハ眞個裁判(看第三百五十四條)ノ理由ヲ記スル時ニ於テ更ニ之ヲ敷演ス可シ

今ヨリ左ニ數種ノ命令ノ理由ヲ一々掲ク可シ

第一 管轄違ノ場合ニ於テハ犯罪ノ場所ハ訴ヲ受ケタル判事ノ管區外ニ在リ若クハ被告人ハ軍人タリト記シ之ヲ事實上ノ理由ト爲シ又犯罪ノ地ヲ以テ判事ノ管轄ト定ムルノ規則又ハ軍人ヲ以テ軍法會議ノ管轄ト定ムル規則ヲ掲ケ之ヲ法律上ノ理由ト爲ス可シ是等ノ場合ニ於テハ事件甚タ簡易ナルニ因リ判事左ノ如ク言渡ヲ以テ足レリトス曰ク「犯罪アリシト爲ス場所某ノ地ハ我管轄外ニ在ルニ由リ又ハ被告人罪ヲ犯シタリトスル時節ニ在テハ軍人ナリシニ由リ乃チ被告人ヲ管轄判事ニ移送スルヲ命スト」○又被告事件既

豫審ノ終結

コ召集セル高等法院ニ屬スルヲ以テ普通判事ノ管轄違ナリトスル
コモ有ル可シ

第二 免訴ノ場合ニ於テハ被告人ニ對シ充分ナル證據ナシト又ハ
其無罪ノ證據アリトシ若クハ期滿免除ノ期限既ニ經過シタル旨ヲ
記シ之ヲ事實ノ證據ト爲ス是等ノ場合ニ於テハ既ニ繼續ス可キノ
場合ナキヤ明カニシテ又他ニ法律上ノ理由ヲ掲ルモ其益アラサル
ナリ

第三 公判ヲ行フ可キ三箇ノ法廳ノ一ニ事件ヲ送致スル場合ニ於
テハ事實上ノ理由トシテ被告人ニ對シ豫審ニテ得タル斯々犯罪ノ
充分ノ證據アル旨ヲ記ス可シ而シテ之ヲ送致スルニ就テハ法律上
ノ理由トシテ其所爲ヲ罰スル法律ノ明文ヲ指示ス可シ

第二百四十九條、第二百五十條及ヒ第二百五十一條

〔第三百五十七號〕 檢察官ノ故障アルコト非サレハ假釋ヲ遲延スルヲ
得サルカ故ニ判事ノ命令書ハ猶豫ナク之ヲ政府ノ目代ニ移送ス可
シ但シ贖本ヲ用ヒス原本ノ儘、之ヲ移ス可シ

之ニ反シテ被告人及ヒ民事原告人ハ書記局ニ命令書ノ返送アリタ
ルヨリ二日內ニ其贖本ヲ受取ル可シ

若シ檢察官ニ於テ假釋若クハ確定ノ釋放ヲ妨ケント欲スル時ハ直
ニ之ニ故障ヲ申立ルヲ要ス但シ之カ爲メ二十四時間ヲ許ス而已○
此條例ハ當ニ豫審終結ノ言渡ヲ以テ附屬ス可キ釋放而已ニ適施ス
ルコト非ス豫審中ニ附屬ス可キ假釋ニモ亦適用ス可シ(看第二百三十
條)

第二百五十二條

〔第三百五十八號〕 既ニ嫌疑アル被告人ヲ捕獲シ得サルヲ又ハ拘留

狀、收監狀ニ由リ被告人ヲ繫留シタルノ後逃亡スルコト若クハ假釋ヲ受ケシ被告人判事ノ最初ノ請求ニ應ジ出頭セサルコト等往々之レ有リ此場合ニ於テハ敢テ豫審ヲ停止スルコトナク繼續シテ之ヲ行フ可シ若シ被告人免責ノ爲メ其證人又ハ其他ノ證據ヲ差出サ、ル時ハ是カ爲メ原告ノ證據或ハ一層其勢力ヲ加フル者ト爲スニ足ルコト有ル可シ

故ニ輕罪裁判所若クハ重罪審院ニ向テ送致スルノ命令ヲ爲スコト往之レ有リ但シ其命令書ニハ被告人令狀ニ從ハサリシ旨ヲ記載ス可シ

該命令ニ對スル通常二箇ノ上訴即チ故障及ヒ控訴ハ共ニ被告人捕獲ニ就クニ非サルヨリハ之ヲ申立ルコトヲ禁ス

控訴ヲ爲スノ權利スラ猶ホ之ヲ禁ス况ンヤ大審院ヘノ上告ニ於テ

チャ(第五百三十一條)

第二百五十三條

〔第三百五十九號〕 輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ送付ス可キ被告人ハ逃亡スト雖モ之カ爲メ公判手續ヲ著大ニ變更スルコトナシ

右ノ被告人ハ次篇第一章、第二章ニ掲ケタル闕席裁判ヲ受ク可シ(第三百八十八條以下、第四百十四條以下)

第二百五十四條

〔第三百六十號〕 重罪事件ハ元ト其重劇ナルニ因リ法律ニ於テハ重罪審院ニ送致シタル被告人即チ以後重罪被告人トナリタル者チシテ有益ノ時間ニ訴ノ告知ヲ受ケシムルカ爲メ及ヒ法廳ノ招呼ニ應セシムルカ爲メ數多ノ注意ヲ設ケタリ○重罪審院長ハ重罪被告人チ法律ニ背反スル者即チ抗傳者ト爲シ其命令書ヲ公布シ以テ重罪

被告人ニ出頭ス可キ最終ノ督促ヲ爲ス可シ○其命令書ヲ貼附スル
 ハ該被告人ヲシテ之ヲ知ラシムルコ容易ナラシムル爲メナリ且ツ
 又其血屬親若クハ其朋友ヲシテ本人ニ其旨ヲ知ラシメ以テ法律ト
 法應トノ定ムル所ニ背カシメサル様注意セシムルカ爲メナリ
 重罪被告人カ自由ニ其財産ノ處分權ヲ有スルカ如キハ則チ其法應
 ノ命ニ抗シテ止マサルノ方法ヲ得セシムルノ恐レ有ルヲ以テ乃チ
 其處分權ヲ取上ケ而シテ其裁判上ノ管財人即チ預リ人ヲ命ス可シ
 ○該管財人ノ權利義務ハ彼ノ民事上裁判所ヨリ命スル所ノ他人ノ
 財産ノ管理人ノ權利義務ト異ナルヲナシ○蓋シ法律ニ於テハ茲ニ
 其詳細ヲ盡サス○此預リ人ヲ監督スルノ任アル者ハ檢察官即チ是
 ナリ

第二百五十五條

〔第三百六十一號〕 本條ノ條例ハ全ク人情ニ基ク者ニシテ更ニ其辯
 明ヲ須フル所ナシ

本條ノ場合ニ於テハ毫モ犯罪ノ査定ヲ要セス唯、被告人ノ親族其扶
 助ヲ受ルチ緊要トスルヤ否ヲ査定スルニ止マルカ故ニ即チ民事裁
 判所其扶助ノ爲メノ管轄タリ

第二百五十六條

〔第三百六十二號〕 被告人裁判ヲ受ルノ前ニ出頭シ而シテ之ヲ繫留
 シタル時ハ此者ニ對シ通常ノ手續ヲ變スルノ理ナシ

若シ處斷アリタル後出頭セル場合ニ於テ其處置如何ハ之ヲ第三篇
 ニ掲ク可シ(第五百二十八條以下)

第二百五十七條

〔第三百六十三號〕 本條ニ掲クル二箇ノ條例ノ目的ハ即チ豫審判事

チシテ豫審處分チ怠慢セシメス且ツ之チ必要ノ外ニ遷延セシメサルニ在リ

裁判所長ハ常ニ豫審判事チシテ一般ノ利益ト被告人ノ利益トニ於テ豫審ヲ速行セシムルノ注意ヲ爲スヲ得○又該所長ハ豫審判事ニ對シテ裁判拒絕ノ罪人タル可キニ至ル旨ノ命令ヲ下スヲ得可シ(看刑法草案第三百十八條)

檢事長ハ豫審判事ノ監督ヲ爲スノ權利アルハ是レ人ノ知ル所ナリ(看第七十九條)

第四章 豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

豫審中ノ故障 第二百五十八條 豫審中其終結ニ至ル迄故障ノ手續ハ檢察官ニモ又被告人ニモ開始セラル可シ(治、第二百三十四條○草、第二百七十四條)

第一 管轄違ノ申立又ハ其抗辯ノ憑據ヲ棄却シタル豫審判事ノ決

デクリナトリール
エキセフシヨシ

定ニ對シ(草、第五十九條、第二百三十九條)

第二 法律ニ反シタル拘留狀又ハ收監狀ノ出發ニ附シ(草、第四百四十二條、第四百四十三條)

第三 判事假釋ノ事項ニ設定セル法式及ヒ要件ヲ遵奉セス此假釋ヲ許與シ又ハ拒絕スルニ對シ(草、第二百三十條以下○佛治、第九條)

第四 其他凡テ越權ヲ構成スル決定ニ對シ(草、第二百七十六條、第二百七十八條ノ二、第二百九十條、第五百六十五條)

法式 第二百五十九條 故障ハ其論據トナル方法ヲ用ヒ又ハ用ヒスシテ裁判所ノ書記局ニ爲シタル^{モライアン、アー、ラッペユイ}申明書ニ由テ之ヲ組成ス若シ故障檢察官ノ爲ス所ニ係ラハ書記其謄本ヲ被告人ニ送達シ被告人ハ^{デクラランシヨシ}趣意書ヲ書記局ニ差出シ其故障ヲ攻撃スルヲ得(草、第二百七十八條)

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

効力

故障ニ由テ攻撃セラレタル事件ノ假リ執行ハ之ヲ停止ス可カラス但シ第二百五十一條ニ述ヘタル假釋ニ附テハ此限ニ在ラス(治、第二百三十五條○草、第二百七十九條、第二百八十三條、第三百五十九條ノ二、○佛治、第三百三十五條第八項、第十一項)

會議局ノ決定

第二百六十條 裁判所ハ少クモ判事三名會議局ニ集合シ訴訟手續及

ヒ呈出セラレタル趣意書ヲ吟味シ檢察官ヨリ出シタル論結書ニ因リ

短キ期限^{可成速}ニテ故障ヲ審判ス可シ

裁判所ノ決定ハ直ニ執行セラル可シ又後文ニ記スル所ノ豫審終結ノ

命令書ト共ニスルコト非サレハ此決定ニ對シテ控訴ヲナスコト得ス(治、

第二百三十六條○草、第二百六十八條○佛治、第三百三十五條第六項)

有的ノ管轄抵觸ノ抗辯ノ憑據

第二百六十一條 判事ノ管轄ナルト其所爲ノ適法ナルトニ拘ハラス

若シ二名ノ豫審判事又ハ一名ノ豫審判事ト一箇ノ裁判所トニ於テ同

中止

時ニ同一ノ事件又ハ附帶ノ事件ヲ受理シタルヲ以テ決定齟齬ノ危険アル時ハ檢察官、被告人及ヒ民事原告人ヨリ有的ノ管轄抵觸^{有的ノ管轄ハ二箇以上ノ裁判廳又ハ裁判官互ニ己レカ管轄ナリト稱シテ相爭フヲ謂フ即チ無的ニ反スルノ辭ナリ無的ノ管轄抵觸トハ數箇ノ裁判廳又ハ裁判官ニ於テ互ニ己レカ管轄ニ非スノ抗辯ノ憑據ヲ爲スコト得}ト稱シテ共ニ訴ヲ受ルヲ拒絕スルヲ謂フ

故障

若シ判事抗辯ノ憑據ヲ認許セタル時ハ豫審^{シニールツリ}ヲ中止シ總テノ事物皆ナ^{シヨス}其儘ニ指置ク可シ若シ抗辯ノ憑據ヲ棄却シタル時ハ之ニ反ス

會議局ニ箇ノ決定

判事抗辯ノ憑據ヲ認許スルト又之ヲ棄却スルトニ拘ハラス故障ハ豫審終結迄會議局ニ於テ受理セラル可シ(治、零○草、第三百十八條以下、第五百三十二條第四項、第五百九十八條以下)

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

上等ノ法廳ニテ管轄規定ノ審判ヲ爲ス迄其儘ニ差置カル可シ
 若シ會議局ニテ申告ヲ受ケタル管轄牴觸ノ存在ヲ認知セサル時ハ該
 局ハ豫審手續ノ繼續ヲ爲ス可キヲ命令ス可シ但シ管轄規定ノ下ニ
 就キ訴訟關係人ヨリ直接ニ訴ヲ爲スノ權利ヲ妨碍スルコトナカル可シ
 (治、零〇草前條ニ同シ)〇佛治、第五百二十五條以下〇佛訴訟法、第三百六
 十三條以下)

管轄規定

第二百六十三條 若シ管轄牴觸ノ申告ヲ受ケタル判事皆ナ同一ノ控
 訴院ノ管區内ニ在ル時ハ管轄規定ノ事ハ第三百二十二條ニ豫定セル
 公判廳ニ對スル管轄規定ト同一ノ法式ヲ以テ該院ニ請願セラル可シ
 若シ判事同一ノ控訴院ノ管轄ニ屬セサル時ハ管轄規定ノ請願ハ第四
 篇第三章ニ循ヒ直接ニ大審院ニ附セラル可シ(治、零〇草、第二百六十一
 條ニ同シ)

判事ノ拒謝

第二百六十四條 豫審判事ハ豫審終結ノ前ニ左ニ掲クル理由ニ因テ
 檢察官若クハ被告人若クハ民事原告人ヨリ拒謝一ニ忌避、又同セラル
 避ト翻譯スルヲ得

- 第一 若シ豫審判事又ハ其妻ト被告人、民事原告人又ハ是等適正ノ
 配耦者トノ間ニ第百九十七條ニ豫定セル系統及ヒ等級ニ於ケル血
 屬親又ハ姻族親ノ關係アル時(治、第二百三十七條)
- 姻屬ノ關係ヲ生セシ婚姻解止シタリト雖モ若シ此婚姻ヨリシテ舉
 ケタル兒子在ル時ハ亦同一ノ拒謝ノ原由成立ス可シ
- 婚姻解止シ且ツ兒子アラサル時ハ拒謝ハ婿及ヒ外舅又ハ配耦者ノ
シヤンドル兄弟ノ等級ニ迄制限セララル可シ
- 第二 判事若シ被告人又ハ民事原告人ノ後見人タル時(治、第二百三
 十七條)

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

第三 若シ判事訴ヲ受理スルノ前共事件ニ附キ證人トシテ審聽セラレタルコトアル時(治、零)

第四 若シ判事其妻並ニ上ニ指示シタル等級ニ於ケル其血屬親又ハ其姻屬ノ一人直接ニ重罪又ハ輕罪ニ由テ損害ヲ受ケタル時(治、零)

第五 若シ豫審開始後判事又ハ第一項ニ指示セル人ノ一人カ被告人若クハ民事原告人或ハ是等ノ者ノ權威ノ下ニ在ル人ノ脅迫又ハ

暴行ノ目的暴行脅迫ヲ受ケタル時(治、零)

第六 若シ判事又ハ其妻同上ノ人ノ方ヨリ假令ヒ賄賂ノ未遂犯ノ性質ヲ有セサルモ贈物又ハ供給ヲ收受シ又ハ承引シタル時(治、第二

百三十七條○草、第三百三十條以下、第五百三十二條第一項○佛訴訟法、第三百七十八條以下)

法式判事ノ答辯 第二百六十五條 拒謝ハ原本二通ノ請求書ニ趣意書及ヒ證據トナル

可キ書類ヲ添ヘ書記局ヲ經由シテ之ヲ判事其人ニ請願ス可シ
總テ是等ノ書類ハ其拒謝ヲ受ケタル判事ニ交通セラル可シ該判事ハ二十四時内ニ其拒謝ヲ認許スルヤ又ハ拒絶スルヤヲ其請求書ノ紙尾ニ掲ケ以テ其答ヲ爲スヲ要ス
其原本ノ一通ハ書記局ノ手ヲ經テ請願人ニ返却ス可シ(治、第二百三十八條)

會議局

第二百六十六條 判事拒謝スルコトヲ拒ミタル場合ニ於テハ其請願人

ハ第二百五十九條ニ定メタル法式ニ循ヒ裁判所ニ故障ヲ爲スヲ得

裁判所ニ於テハ會議局ニ集會シ豫審判事ノ説明ヲ聽キ而シテ第二百

六十條ニ記シタル法式ニ循ヒ審判ヲ爲ス可シ

豫審判事ハ評議前ニ退出ス可シ(治、第二百三十九條)

繼續若クハ中止 第二百六十七條 拒謝セントスル請願及ヒ故障アリト雖モ是ヲ以テ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

豫審判事豫審ヲ繼續スルノ妨碍ト爲ス可カラス但シ終結ノ言渡ハ之ヲ爲スヲ得ス

又豫審判事ハ急速ヲ要セサル場合ニ於テハ豫審ヲ中止スルヲ得(治、第二百四十條○草、第三百三十一條)

控訴、上告

第二百六十八條 拒謝ノ原由ノ棄却ノ場合ニ於テハ控訴ヲ爲スヲ得然レモ唯、終結ノ命令ニ對シタル控訴ト共ニ之ヲ爲ス可シ(治、第二百四十一條○草、第二百六十條)

隨意ノ拒謝

第二百六十九條 總テ豫審判事自カラ上ニ列記セル拒謝ノ原由ノ一アルヲ認メタル時ハ自カラ拒謝ス可キヲ裁判所ニ申立ツ可シ
判事ノ身上ニ係ル原由ニシテ法律ニ定メサル者ト雖モ其回避ヲ命スル如ク見ユル時モ亦前項ニ同シ
是等二箇ノ場合ニ於テ會議局ハ拒謝ノ原由ヲ認可シ又ハ却下ス可シ

アブスタンシヨムコトニシテ

プロボセー

アツルブライ

ルシエトラ

の

但シ此事ニ附テハ毫モ上訴ヲ許サス(治、第二百四十二條)

拒謝ノ認許

第二百七十條 若シ拒謝ヲ認許シタル時ハ拒謝セラレタル判事ハ以後共同一ノ事件ニ附キ總テノ事ヲ行フノ權ヲ失フ可シ

サブストニール

ランブラッセル

該判事ハ所長ノ命ニ據リ同裁判所中他ノ判事ヲ以テ代任セララル可シ其代替セラレタル判事ハ職權ヲ以テ又ハ訴訟關係人ノ請願ニ由リ拒謝セラレタル判事ノ所爲ノ全部又ハ一部ヲ再行スルヲ得(治、第二百四十三條○草、第三百三十三條)

書記ノ拒謝

第二百七十一條 書記及ヒ其補員モ判事ト同一ノ原由ニ就キ拒謝セララル、ヲ得

其請願ハ直接ニ之ヲ會議局ニ爲ス可シ(治、第二百四十四條○草、第三百三十二條)

政府ノ目代ノ隨意ノ拒謝

第二百七十二條 政府ノ目代ハ被告人又ハ民事原告人ニ由リ拒謝セ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

檢事補ノ隨意
ノ拒謝

ラル、ヲ得ス然レモ口代ハ常ニ己レカ回避ヲ命ス可シト見ユル總テ
ノ原由ニ依テ自カラ拒謝セシト會議局ニ申立ツ可シ
此場合ニ於テハ獨リ第二百六十九條ヲ適用ス可シ

拒謝ノ認許ヲ受ケタル政府ノ目代ハ裁判所ノ判事之ニ代任ス可シ

若シ拒謝ノ原由檢事補ノ身上ニ存スル時ハ檢事補ヨリ政府ノ目代ニ

其指令ヲ請フ可シ該目代ハ之ニ事件ヲ繼續スルヲ許シ又ハ之ヲ免

カレシム可シ(治、第二百四十五條○草、第三百三十二條)

上訴判事ノ拒
謝

第二百七十三條 若シ拒謝ノ原由カ豫審ノ所爲ニ對シテ爲シタル上

訴ヲ審判スル始審又ハ控訴ノ裁判所ノ一名又ハ數名ノ官吏ニ存在ス

ル時モ亦前ノ數條例ヲ適用ス可シ

且ツ第五十五條ニ背キ攻撃セラレタル決定ニ干預シタル判事上訴ノ

法應ニ在テ職ヲ執ル時モ亦之ヲ拒謝スルヲ得

シエーシユ

檢察官終結ノ
命令ニ故障ヲ
述フル事

第二百七十四條 第二百四十二條及ヒ以下ノ數條ノ明文ニ據リ豫審

終結ヲ申渡ス判事ノ命令ハ總テノ場合ニ於テ檢察官故障ヲ以テ之ヲ

攻撃スルヲ得(治、第二百四十六條○草、第二百五十八條○佛治、第三百

十五條第一項)

第二百七十五條 民事原告人ハ判事ヨリ不當ニ管轄違ナリト陳述シ

タル命令及ヒ訴ヲ免スルノ言渡ヲナシ又ハ違警罪裁判所ニ交付スル

ノ言渡ヲナシタル命令ニ對シ故障ヲ述フルノ權利ヲ有ス

其他二箇ノ命令ハ^{重罪審院}判所ニ移スノ命令^{又ハ輕罪裁}若クハ豫審判事若シハ事件ノ

交付ヲ受ケタル法應ニ於テ民事原告人ノ利益ニ妨碍ヲ與フル越權又

ハ管轄違ノ事アルニ非サレハ襲撃スルヲ得ス但シ犯罪ノ程度ニ附

テノ管轄違ノ事ハ此限ニ在ラス(治、第二百三十四條、第二百四十六條○

草、零○佛治、第三百三十五條第二項)

民事原告人終
結ノ命令ニ故
障ヲ述フル事

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

被告人終結ノ
命令ニ故障ヲ
述フル事

第二百七十六條 被告人ハ不當ニ判事自カラ管轄違ナリト陳述シタル命令ニ對シ又ハ重罪審院ニ交付スルコトヲ言渡シタル命令ニ對シ故障ヲ述フルノ權利ヲ有ス其他交付ノ場合ニ於テモ越權又ハ管轄違ニ附テ民事原告人ト同一ノ要件ニ據リ故障ヲ述フルノ權利ヲ有ス(治、第二百四十六條〇草、零〇佛治、第三百三十五條第三項)

猶豫期限

第二百七十七條 故障ヲ述フルノ猶豫期限ハ總テノ有權者ニ附テ一日ナリトス エーヤン、ドロア

其期限ハ檢察官ニ附テハ命令書ノ交通アリタル日ヨリ經過ス可シ而シテ民事原告人又ハ被告人ニ附テハ是等ノ者ニ爲シタル送達ヨリ起算ス(治、第二百四十七條〇草、第二百八十二條、第二百九十六條〇佛治、第三百三十五條第四項)

法式

第二百七十八條 檢察官ノ故障ハ命令書ノ原本ニ記入セラル可シ エンスクリー

民事原告人及ヒ被告人ノ故障ハ若クハ命令ノ送達書二通ニ之ヲ記シ若クハ裁判所ノ書記局ニ爲シタル伸明ヲ以テ之ヲ爲ス可シ デクラフシヨ

故障人ハ其故障ヲ爲シタルヨリ趣意書ヲ以テ其方法ヲ供スルカ爲メ ラツボサン

更ニ三日ノ猶豫期限ヲ有ス可シ モアイン

書記ハ猶豫ナク故障ト共ニ其趣意書ヲ防禦ス可キ者ニ送達ス可シ

猶豫期限ハ防禦人ニ對シテハ此送達ノ日ヨリ起算ス可シ(治、第二百四十八條〇草、第二百五十九條)

故障ノ新タナル方法

第二百七十八條ノ二 一旦故障ヲ組成シ且ツ其趣意書ヲ供シタル故障人ハ更ニ又故障ノ方法書ヲ差出スコトヲ得 フタル

附帶ノ故障

又防禦關係人ハ假令ヒ猶豫期限ノ經過後ト雖モ自己ニ屬スル理由ニ附キ自カラ附帶ノ故障ヲ組成スルコトヲ得然レモ其他ノ法律上ノ猶豫期限ヲ延延スルヲ得ス(治、第二百四十九條〇草、第五百三十四條、第五百

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

五十五條

職權ヲ以テ取
消フ爲ス事

又故障ヲ受理シタル會議局ハ其職權ヲ以テ判事ノ越權及ヒ犯罪ノ場
所ノ故ニ因レル管轄違ヲ除ノ外其他ノ管轄違其他總テ公ケノ秩序ノ
規則ヲ犯シタル判事ノ命令ヲ取消スヲ得可シナルドレヒニテヨク治第二百五十四條○
草第二百八十六條、第二百九十條、第四百一條

停止ノ効力

第二百七十九條 終結ノ命令ニ附テノ故障ノ期限及ヒ故障ハ其命令
ノ執行ヲ停止ス可シ但シ身體繫留ニ關スル者ハ此限ニ在ラス治第二
百五十條○草、第二百五十一條、第二百五十二條、第二百八十三條、第三百
五十九條ノ二、第五百二十五條○佛治、第三百三十五條第八項

會議局ノ決定

第二百八十條 訴訟書類及ヒ趣意書ハ會議局ニ指出ス可シ
檢察官自カラ故障ヲ組成セサル時ハ書面ヲ以テ自己ノ論結ヲ附與ス
可シ

會議局ハ命令書ヲ以テ審判ス可シ

會議局ハ判事ノ命令ノ全部又ハ一部ヲ確認シ又ハ改良シ又釋放及ヒ

身體繫留ヲ要スル時ハ是カ爲メ審判ヲ下スヲ得治第二百五十一條、

第二百五十二條

交通

第二百八十一條 書記ハ猶豫ナク會議局ノ命令書ノ原本ヲ檢察官ニ
交通ス可シ

書記ハ其謄本ヲ民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ治第二百五十六
條○草、第二百四十九條、第二百五十條

控訴附
法式及ヒ期限

第二百八十二條 檢察官民事原告人及ヒ被告人ハ會議局ノ命令ニ對
シ第二百七十四條以下ニ循ヒ故障ヲ組成シ得可キト同一ノ法式及ヒ
同一ノ場合ニ因リ控訴スルヲ得

猶豫期限ハ第二百七十七條ニ掲ケタルカ如ク計算シテ二日タル可シ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

(治、零〇草、零〇佛治、第三百三十五條第六項)

停止ノ効力 第二百八十三條 控訴ノ期限及ヒ其乞願ハ前條ノ命令ノ執行ヲ停止ス可シ但シ身體繫留ニ關スル者ハ此限ニ在ラス(治、零〇草、第二百五十九條、第二百七十九條)

故障ナキ控訴 第二百八十四條 豫審終結ヲ申渡ス判事ノ命令ニ對シテハ故障ヲ組成スルヲ須ヒス直ニ控訴スルヲ得(草、第三百九十七條、第四百二十五條)

此場合ニ於テハ控訴ノ期限ヲ以テ故障ノ期限ヲ消滅ス可シ 若シ同一(本條)ノ場合ニ於テ一方ニハ故障又他ノ一方ニハ控訴アル時ハ二箇ノ上訴ハ控訴裁判所ニ差向ケラル可シ(治、零)

書類ノ移送 第二百八十五條 豫審終結ヲ申渡シタル豫審判事又ハ會議局ノ命令ニ對シテ控訴ヲ爲シタル時ハ政府ノ目代ハ控訴院附檢事長ニ己レカ

意見ヲ添ヘタル訴訟手續書類ヲ移送ス可シ

證據物件アル時ハ其物件ハ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ書記局ニ假リニ之ヲ留置シ可シ(草、第二百八十八條〇佛治、第三百三十三條)

被告人ノ假釋 被告人ヲ釋放ス可カラサル時ハ同裁判所附監獄ニ之ヲ留置シ可シ

然レモ本章ニ豫定スル上訴手續ノ一ニ賴テ請願人又ハ防禦人タル被告人ハ攻撃サレタル決定ヲ爲シタル法廳ニ假釋ヲ請願スルヲ得

第二百三十條以下ハ此請願ニ適用ス可シ(治、零〇草、第三百六十一條第三項〇佛治、第一百十六條)

附帶ノ控訴

第二百八十六條 訴訟關係人中ノ一人控訴ヲ爲ス時ハ其防禦人タル對手人ノ方ヨリモ事實又ハ總テ法律ノ理由ニ附キ確定審判アル迄ハ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得

檢事長モ亦同一ノ權利ヲ有ス

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

此場合ニ於テ檢事長ハ理由ヲ附シタル自己ノ論結ヲ原裁判所附政府目代ニ送付ス可シ該目代ハ之ヲ被告人ニ送達ス可シ

此被告人ハ己レカ答辯ヲ書記局ニ指出スカ爲メ三日ノ猶豫期限ヲ有ス(治零〇草第二百七十八條ノ二ノ第二項)

職權ヲ以テ取消ス事

第二百八十七條 控訴ヲ受理シタル審院ハ常ニ職權ヲ以テ第二百七十八條ノ二ノ第三項ニ記シタル理由ニ附キ會議局ノ決定ヲ取消ス可シ得可シ(治零)

被告人訊問

第二百八十八條 控訴院ハ自カラ判決ス可キ點ニ附キ被告人ヲ訊問スル爲メ原裁判所ノ判事ノ一名ニ其嘗テ豫審ヲ爲シタル者ナル時ト雖モ囑託ヲ爲スニ必要ト信シタルニ於テハ之ヲ爲ス可シ得可シ又重劇ナシ事件ニ附テハ該院ハ其委員ノ一名ヲシテ被告人ヲ訊問セシムルカ爲メ之ヲ己レカ前ニ移ス可キヲ命合スルヲ得

又該院ハ證據物件ヲ求ムルヲ得(治零治第二百五十三條ヲ比較セヨ(看附言)〇草第二百八十五條〇佛治第二百二十八條)

〔附言〕 治罪法ノ正條ハ會議局ノ決定ニ對スル控訴ヲ除却シ以テ該局ニ控訴院ノ二三ノ特權ヲ移シタリ故ニ本條ニ正條ヲ重テ記シタルナリ

豫審ノ補缺

第二百八十九條 若シ控訴院或ハ其職權ヲ以テ或ハ檢事長ノ論結ニ因リ最初ノ訴ハ總テ犯罪事實ノ正犯、從犯ヲ含蓄セス又附帶若クハ附帶ニ非サル他ノ犯罪ハ豫審ヲ被ラス(ト查定シ)其他總テノ事ニ附キ豫審ノ充分ナラサルヲ查定スル時ハ檢事長ノ訴ト其注意トニ據リ豫審ノ補缺ヲ爲サシメ及ヒ其具申ヲ爲サシムルカ爲メ原裁判所ノ判事一名ニ之ヲ囑託シ若クハ其事ノ處分ヲ爲サシメ且ツ具申ヲ爲サシムルカ爲メ控訴院附ノ委員一名ニ之ヲ任スルヲ得

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

該院ハ訴訟關係人ヨリ供シタル趣意書ヲ見テ囑託シタル判事ノ具申及ヒ檢事長ノ論結書ニ因リ會議局ニ於テ攻撃セラレタル訴訟手續ト豫審ノ補缺ヲ審判ス可シ(治零治第二百五十五條○草零○佛治第二百二十八條第四百二十八條)

控訴院ノ判決 第二百九十條 若シ審院命令ヲ確認スル時ハ其命令ハ完全ノ効力ヲ獲ル旨ヲ申渡ス可シ

若シ審院命令ノ全部又ハ一部ヲ取消シタル時ハ該院ハ更ニ全部ニ附キ命令ヲ下ス可シ(治零治第二百五十二條○草第二百零八條○佛治第二百零二十一條以下)

重罪審院ニ送付 第二百九十一條 若シ審院重罪審院ニ送付スルヲ命令シ又ハ確認スル時ハ該審院控訴院ハ身體繫留ノヲモ命令シ又ハ確認ス可シ

此場合ニ於テ下ニ規定シタル期限内ニ大審院ヘノ上告ナキ時ハ控訴

ナカリシ時ノ如ク檢事長ハ直ニ重罪審院ニ訴訟手續書類及ヒ證據物件ヲ移送シ並ニ被告人ヲ送付スルヲ命令ス可シ

又檢事長ハ第三篇第三章第四百三十二條ニ記スルカ如クアクト、タツキニヤシヨシ公訴狀ヲ屬

文シ又ハ屬文セシム可シ

其他ノ送付ニ關スル時ハ檢事長ハ攻撃セラレタル判決ヲ爲シタル裁判所附政府ノ目代ニ訴訟手續書類ヲ送付ス可シ而シテ此法官ハ事件ノ繼續ヲ要スル時ニハ是カ處分ヲ爲ス可シ(治第二百零六條○草第二百零四十六條、第二百零八十七條、第四百三十二條○佛治第二百零三十條乃至第二百三十二條)

第二百九十二條 總テ其他ノ場合ニ於テ毫モ起訴ヲ始メタルヲナキ重罪又ハ輕罪ノ事實ヲ控訴院附委員ノ一名又ハ數名ヨリ其院長ニ告發シタル時若クハ院長自カラ其事實ノ認知ヲ爲シタル時ハ該院長ハ

檢事長ノ面前ニテ法式ニ循ヒ告發ヲ受ルカ爲メ短カキ期限ニテ會議局ニ各局ヲ集合シ審院ヲ徵集ス可シ而シテ檢事長ハ事件ノ職權ニ依レル起訴ヲ爲シ及ヒ告發ヲ受ケタル事實ヲ豫審ス可キヤ否ノ點ニ附エボカツシヨシキ己レカ論結ヲ付與ス可シ

第一ノ場合
若シ檢事長ニ於テモ起訴ス可キノ意見ニシテ且ツ審院ニ於テモ事件ヲ起訴スル時ハ該院ハ檢事長ノ起訴ト其注意トニ因リ其刑事局ノ委員一名ニ豫審處分ヲ任ス可シ

第二ノ場合
若シ檢事長ハ繼續ス可キ者ナシト論結シ而シテ審院ハ之ニ反スル意見ヲ有スル時ハ該院ハ其事件ヲ起訴シ且ツ委員二名ヲシテ豫審ニ從事セシメ其中一名ヲ以テ檢察官ノ職務ニ充ツ可シ
本條ノ條例ハ高等法院ニテ裁判ス可キ重罪又ハ輕罪ニ關スルモ尙ホ之ヲ適用ス可シ但シ該法院自カラ第百條ニ循ヒ認許セサル時ニ限ル

(治、零〇草、零〇佛治、第二百三十五條、第二百五十條、千八百十年四月二十日ノ佛蘭西法律第十一條)

豫審掛リ判事ノ命令ニ故障ヲ爲ス事

第二百九十三條 前條ニ豫定セル場合ニ於テ豫審掛リ判事ノ命令ハシヨウシユ、エンストリユクトール第二百五十八條以下ノ數條ニ記シタル者ト同一ノ原由及ヒ同一ノ法式、期限ニ因リ會議局ニ集合シタル控訴院ニ向テ故障セラル、ヲ有ル可シ(治、零〇草、零〇佛治、第二百三十六條乃至第二百三十八條)

送付又ハ裁判 第二百九十四條 故障アルト否トチ問ハス重罪ノ充分ナル證據アリ

ト認メタル時ハ事件ハ重罪審院ニ付セラル可シ(草、第四百三十一條)

若シ豫審ニテ輕罪又ハ違警罪ニ過キササル者ト顯表スル時ハ其裁判ハ控訴院ノ刑事局ニ屬シ該局ハ終審ノ審判ヲ爲ス可シ(治、零〇草、零〇佛レウエレイ治、第二百三十九條)

大審院ヘノ上 告 第二百九十五條 前ノ總テノ場合ニ於テ控訴院ノ決定ハ大審院ヘノ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

上告ノ方法ヲ以テ第五百三十九條ニ記セル原由及ヒ區別ニ附キ及ヒ第五百四十四條ニ規定セル法式ニ循ヒ訴訟關係人ハ各之ヲ攻撃スルヲ得(治、第四百十四條、治、第二百五十七條ヲ比較セヨ)○草、零○佛治、第二百九十六條以下)

期限

第二百九十六條 上告ノ期限ハ檢事長ニ附テハ會議局ニテ爲シタル審判ヲ檢事長ニ交通シタルヨリ三日タル可シ

民事原告人及ヒ被告人ハ該審判ノ送達ヲ受ケタルヨリ後テ上文ト同一ノ期限ヲ有ス可シ(治、零○草、第三百六十八條、第四百五條、第四百三十條、第五百十七條)

名代住所選擇

第二百九十七條 本章ニ豫定シタル上訴ハ訴訟人自カラ又ハ其法律上若シハ契約上ノ名代人ニ由リ組成セラル、ヲ得但シ逃亡シタル被告人ニ關シテ第二百五十二條ニ記シタルハ此限ニ在ラス(治、零)

れ

上訴ヲ受理ス可キ法廳所在ノ市府内ニ己レカ眞住所又ハ常ニ寓ス可キ假リ住所ヲ有セサル上訴ノ請願人タリ又ハ防禦人タル總テノ人ハ

アヒチユール

此市府ニ住所ヲ撰擇シ且ツ其旨ヲ書記局ニ通知スルヲ要ス若シ此事ヲ爲サ、ル時ハ送達書ハ此裁判所ノ門戸ニ貼附スルヲ以テ有効ニ送達シタル者トス(治、第二十一條○草、第三百六十條、第五百四十五條○佛

エレクシヨ

アフライシユ

治、第六十八條、第二百一十一條、第百八十三條)

然レモ豫テ先ツ拘留ヲ受ケタル被告人ハ住所ヲ撰擇スルノ責メナシ送達ハ則チ監獄内ニ在ル其人ニ之ヲ爲ス可シ

被告人ノ保障

第二百九十八條 被告人ニ攻撃セラル可キ決定ヲ送達ス可キ總テノ

場合ニ於テハ書記ハ此送達書中ニ上訴ノ權能及ヒ其期限ヲ記載ス可シ

フアキユルテイ

若シ之ヲ爲サ、ル時ハ被告人ハ此脱漏ノ改良セラル、迄其上訴權

ラニシヨ

ヲ保有ス可シ(治、第二百五十八條○草、第三百六十八條)

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

失權ニ對シテ
ノ回復

第二百九十九條 後ノ第三百六十二條乃至第三百六十四條ノ箇條ハ豫審法廳ノ決定ニ對シ遅レテ組成スル上訴ニモ適用ス可シ(治、第二百五十九條)

訴ヲ免カル、
新證據

第三百條

廢棄ス可カラサル者ト爲リタル豫審ノ決定ニ據リ訴ヲ免

カレタル被告人ハ他ノ名稱ヲ以テスルモ同一ノ事實ニ附テハ公訴ニ

由リ決シテ訴ヲ受ルコトナシ但シ此被告人ニ對シ未タ審判ヲ受ケサル

證據ノ顯ハレタル時ハ別段ナリ

此場合ニ於テ假令ヒ控訴院カ最初ノ豫審ニ附キ審判セザリシ時ト雖

モ新證據ハ同院ニ由ルニ非サレハ査定セラル、ヲ得ス

此事ニ附キ檢事長ハ會議局ニ集合シタル刑事局ニ新證據ヲ差出ス可

シ若シ控訴院新ナル豫審ヲ爲ス可シト査定スル時ハ其委員中ノ一名

ニ之ヲ任シ而シテ其餘ノ事ハ第二百八十九條、第二百九十三條及ヒ第

二百九十四條ニ循ヒ處置ス可シ(治、第二百六十一條○草、零○佛治、第二百四十六條乃至第二百四十八條)

要旨

第三百六十四號 豫審ノ所爲ニ對スル上訴手續ノ證明、本章ヲ別
ツ事

第二百五十八條

第三百六十五號 豫審中最初ノ故障ノ四箇ノ場合

第三百六十六號 一 管轄違ノ抗辯ノ憑據

第三百六十七號 二 拘留狀又ハ收監狀

第三百六十八號 三 假釋

第三百六十九號 四 越權

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續 要旨

第二百五十九條

第三百七十號 故障及ヒ總テ上訴ノ法式

第三百七十一號 故障ハ執行ヲ停止セズ假釋ニ附テハ例外ノ事

第二百六十條

第三百七十二號 故障ハ裁判所ノ會議局ニ於テ裁判スル事〇其

決定ハ執行アル事但シ豫審終結ノ命令ニ對スル控訴ハ此限ニ

在ラス

第二百六十一條

第三百七十三號 管轄牴觸ノ抗辯ノ憑據〇日本草案ノ方法ニ於

ケルモ尙ホ有的ノ管轄牴觸ノ在リ得可キ數種ノ場合

第三百七十四號 判事ノ決定ニ故障ヲ爲ストハ茲ニハ民事原告

人ニ屬スル事

第二百六十二條

第三百七十五號 會議局ノ數種ノ決定〇拘留狀ノ効力〇裁判管

轄規定ノ直接ノ請願

第二百六十三條

第三百七十六號 法廳カ二名ノ豫審判事ノ間ニ管轄規定ヲ爲ス

カ爲メニハ二箇ノ要件アル事

第二百六十四條

第三百七十七號 拒謝ノ六箇ノ場合

第二百六十五條

第三百七十八號 拒謝願ノ請求書

第二百六十六條

第三百七十九號 判事ノ決定附拒謝ヲ拒ム事會議局ニ故障ヲ爲

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續 要旨

ス事

第二百六十七條

第三百八十號 終結ノ旨渡ヲ除ノ外豫審ノ繼續又ハ其中止

第二百六十八條

第三百八十一號 控訴ノ權利ノ停止 附其理由

第二百六十九條

第三百八十二號 判事其隨意ノ拒謝ヲ中立ル事會議局ノ決定但
シ此決定ニ附テハ上訴スルヲ得ス

第二百七十條

第三百八十三號 拒謝ノ認許

アドミレション

第二百七十一條

第三百八十四號 書記ノ拒謝

第二百七十二條

第三百八十五號 政府ノ目代又ハ其補員ノ拒謝

第二百七十三條

第三百八十六號 故障及ヒ控訴ヲ審判ス可キ判事ニ對スル拒謝

第五十五條ノ場合ニ於ケル拒謝

第二百七十四條

第三百八十七號 終結ノ命令五箇ニ附キ政府目代故障ヲ爲ス事

第二百七十五條

第三百八十八號 民事原告人有限ノ故障

第二百七十六條

第三百八十九號 被告人有限ノ故障

第二百七十七條

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續 要旨

第三百九十號 故障ノ期限

第二百七十八條

第三百九十一號 故障ノ法式、趣意書ヲ提出スルノ期限

第二百七十八條ノ二

第三百九十二號 故障人ノ方ニ存スル新タナル方法、故障ノ防禦人ノ附帶ノ故障、職權ヲ以テスル處分ノ方法

第二百七十九條

第三百九十三號 故障ハ假釋ノ執行ヲモ停止ス但シ身體繫留ヲ停止ス

第二百八十條及第二百八十一條

第三百九十四號 會議局ノ決定、交通及ヒ送達

第二百八十二條

第三百九十五號 此決定ニ對スル控訴附駁議答辯

第二百八十三條

第三百九十六號 釋放ニ關スル時ニ於テモ亦控訴ハ此命令ヲ停止スルノ効力アル事但シ身體繫留ハ別段ナリ

第二百八十四條

第三百九十七號 故障ヲ欠キタル時ニ於ケル控訴〇期限ノ混淆コンヒュージョン

第二百八十五條

第三百九十八號 控訴院ニ訴訟手續書類ノ移送、被告人及ヒ證據物件ノ留置

第二百八十六條及第二百八十七條

第三百九十九號 被告人ノ附帶ノ控訴

第四百號 檢事長ノ附帶ノ控訴

第四百一號 會審院職權ヲ以テスル取消

アンヒルマシヨ

第二百八十八條

第四百二號 控訴院ヨリ請求シタル豫審ノ増補

第二百八十九條及第二百九十條

第四百三號 控訴院其職權ニ依リ又ハ檢事長ノ請求ニ依リ命令シタル新事實又ハ新被告人ノ下調

第四百四號 會議局ノ決定附 數種ノ決論

ソリユシヨ

第二百九十一條

第四百五號 數種ノ場合ニ於テ命令ヲ執行スル事

第二百九十二條

第四百六號 控訴院ノ職權ヲ以テスル起訴ノ權利、該制限外ノ權ノ理由 エキゾルヒツタン

第四百七號 起訴ノ法式

第二百九十三條

第四百八號 起訴ノ場合ニ於テ豫審ノ結局、豫審掛リ判事ノ命令 附 審院ニ故障ヲ爲ス事

第二百九十四條

第四百九號 重罪審院ニ送付ヲ要スル時之ヲ爲ス事○輕罪及ヒ 違警罪ノ言渡

第二百九十五條

第四百十號 大審院ニ上告ヲ爲ス事○其數種ノ原由及ヒ要件ノ 說ハ之ヲ他章ニ讓ル

第二百九十六條

第四百十一號 上告ノ期限

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續 要旨

第二百九十七條

第四百十二號 名代人又ハ代言人ノ上訴〇住所撰擇

第二百九十八條

第四百十三號 被告人ニ上訴スルノ權利アル事及ヒ之ヲ履行スル爲メ猶豫期限ヲ告知スル事

第二百九十九條

第四百十四號 上訴失權ニ對スル回復〇送付ノ事

第三百條

第四百十五號 新證據ノ場合ニ於テ起訴ヲ再行スル事

〔第三百六十四號〕 抑豫審判事ノ履行スル處分ハ素ト被告^{ハフリーズ}人ト檢察官ト對質シ以テ公ケノ辯論ヲ爲ス者ニ非サルカ故ニ大ニ闕席裁判ニ類スル者アルナリ是ヲ以テ其處分タル從テ之ヲ爭辯攻撃シテ更

ニ又之ヲ改良スルヲ有ル可シ〇斯ル場合ニ於テ被告人檢察官及ヒ民事原告人ノ爲メニ開始スル上訴ノ手續ヲ名ケテ故^〇障ト云フ此名稱ハ他闕席裁判ニ對スル上訴ニモ亦採用スル者タリ
法律ニハ豫審中共處分ヲ停止シ又ハ其手續ヲ改正セシムル爲メ故障ヲ爲スノ場合及ヒ豫審ノ結果ヲ取消サシムルカ爲メ其終結ノ時ニ故障ヲ爲スノ場合等順次之ヲ提出ス
第二百五十八條及ヒ其以下ノ數條ニ於テハ豫審中故障ヲ爲スノ規則ヲ定メ第二百七十四條及ヒ其以下數條ニ於テハ豫審終結後ノ故障ノヲ規定セリ
之ニ次クニ故障ニ附キ申渡シタル決定ニ對スル控訴(第二百八十二條以下)及ヒ豫審補缺ノ附帶ノ控訴及ヒ職權ヲ以テスル起訴權ノ事ヲ以テシ終リニ第四篇ニ讓リタル大審院ヘノ上告並ニ結局ノ二三

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ノ條例ヲ記載シタリ

第二百五十八條

四四六

〔第三百六十五號〕先ツ法律ニハ豫審中履行シ得可キ最初ノ故障四箇ノ場合ヲ指示セリ蓋シ此レヨシテ止ルニ非スト雖モ此四箇ハ最モ屢履行ス可キ故障ナルヲ以テナリ其他又二箇ノ場合アリ最モ稀ニ生スル者ナルヲ以テ之ヲ後文ニ掲ケタリ

〔第三百六十六號〕第一ノ場合○凡ソ犯罪ノ場所其性質其等級及ヒ被告人ノ身分ノ故ニ據リ管轄違ニ四種アルヲハ人ノ能シ知ル所ナリ(看第五十八條及第五十九條)

判事ハ職權ヲ以テ己レカ管轄ニ非サルヲ認メ而シテ之ヲ中渡スルヲ有リ然レモ又其管轄ナリト信シ或ハ其必ス管轄ナル可シト信スルヲ有ル可シ若シ檢察官ニ於テ判事ニ反對スル意見アル時ハ其

判事ノ受理ス可キ者ニ非ストノ論結ヲ申立ルヲ得被告人モ亦判事ノ管轄違ノヲニ附キ請求書ノ方法ニ因リ之ヲ申立又ハ抗辯ノ憑據ヲ述フルヲ得蓋シ法律上特ニ請求書ノ法式ヲ確定セサル者ハ是レ此故障ノ事ニ附キ被告人ノ權限ヲシテ擴張セシメタルニ在リ若シ判事其管轄ナル可キヲ審判ス可キノ督促ヲ受ケタルニ言渡ヲ以テ此申立ヲ棄却シタル時ハ其判決ニ對シ直ニ故障ヲ爲スヲ得可シ而シテ判事ハ全ク瑕^{デヒス}瑕^{デヒス}ヲ受ク可キ豫審ヲ繼續スルモ其益アルヲナシ

若シ之ニ反シ判事其職權ヲ以テ若シハ訴訟關係人ノ申立ニ因リ自カラ其管轄違ナリト申述スル時ハ是亦豫審終結ノ一場合(第二百四十二條)ニシテ之カ爲メノ故障ハ則チ第二百七十四條ニ規定スル所是ナリ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

四四七

〔第三百六十七號〕 第二ノ場合○自由剝奪ニ係ル二箇ノ令狀ハ規定シタル場合ト要件トヲ具スルコト非サレハ之ヲ出發スルコト得ス(第四百十條、第四百四十二條、第四百四十三條)此所爲ニ對スル故障ハ檢察官被告人共ニ等シク之ヲ爲スコトヲ允許セラル何トナレハ檢察官ハ公益ノ名義ニ因リ被告人若シ判事ノ越權ニ對シ自カラ防禦スルコトナケレハ則チ之ヲ防禦セサル可カラサルコトハ之ヲ忘失シ去ラサルヲ要スレハナリ

〔第三百六十八號〕 第三ノ場合○茲ニハ法律ニ背反シテ自由ヲ附屬シ又ハ拒絕スルコトヲ記セリ但シ假リノ自由ナリト知ル可シ○假釋ヲ許スト許サ、ルトニ就キ其危險有無如何ハ獨リ判事ノ査定ニ委テラレタル時ハ檢察官並ニ被告人ヨリ之カ故障ヲ爲スコトヲ得ス其他判事ノ權限内ニ在ル數多ノ豫審處分ニシテ故障ノ目的タルヲ得サ

ル者夥多之レ有リ若シ夫レ此場合ニモ故障ヲ許ストセンカ是レ豫審處分ヲ全ク公判廳ニ移スコト異ナラス之ヲ移スハ是レ法律ノ採ラサル所ノ方法ナリ○然レモ豫審中判事假釋ヲ付與スルニ方リ被告人ノ請願ナキ時ニ於テシ若クハ被告人ヲシテ呼出ニ應ジ出頭セシムルノ盟約ヲモ爲サシメサルニ於テハ是レ即チ法律ニ記載セル假釋ノ爲メノ法式ト其要件トヲ遵奉セサル者ナリ故ニ檢察官ハ必ス故障ヲ爲サ、ル可カラス(第二百五十一條)○之ニ反シテ判事被告人ヲシテ遠隔セシメサランカ爲メ呼出ヲ爲サ、ルモ毎日書記局ニ出頭ス可シトノ命令ヲ下シタルニ於テハ被告人ハ之ニ對シ故障ヲ爲スノ權利ヲ有ス何トナレハ判事ハ法律上定ムル所ノ要件ヲ超過シ即チ「越權」ニ外ナラサレハナリ

保證金額ヲ定ムルコトハ判事ノ査定ニ委テラレタリ然レモ判事被告

人ヨリ保證金ヲ取立ルニ唯其欺計ヲ用ヒ或ハ又之ニ反シテ犯罪ノ重劇ナラス若クハ被告人ノ位置ヲ斟酌セシテ明カニ過度ノ保證金ヲ請求シタル時ハ第一ノ場合ニ於テ檢察官之ニ故障ヲ爲シ第二ノ場合ニ於テ被告人之ニ故障ヲ爲ス可シ何トナレハ法律上其文面ニ於テ右等ノ取立方チ或ハ認許スト雖モ決シテ其精神ニ非サレハナリ

又假釋ヲ豫審終結ノ言渡ノ時ニ付與シ又ハ拒絕スルニ於テハ更ニ故障ノ目的トナルコト有リト雖モ茲ニハ未タ此點ニ迄論究セズ
 [第三百六十九號] 第四ノ場合○前ノ數箇ノ場合就中殊ニ其最終二箇ノ場合ハ深ク之ヲ論究スル時ハ則チ越權ノ大意ニ立入ル可シト雖モ亦特別ノ名稱ヲ附スルニ差支アラサルナリ
 其他判事ハ故障ニ由リ攻撃ヲ受クル所ノ數多ノ越權ヲ醸スコト有ル

可ク而シテ一々之ヲ前以テ法律ニ明示スルニ難キ者ナレハ一語ニシテ汎シ是等ノ意義ヲ含蓄スル所ノ解シ易キ語ヲ採用スルヲ必要トス佛蘭西法律ハ茲ニ之ヲ使用セスト雖モ行政ノ事項ニ於テハ屢用フル所ナリ

又法律ニ許容シタル制限外ニ密室監禁ヲ遷延シ又現行犯ニ非サル場合ニ於テ判事其職權ヲ以テ豫審ヲ開始シ又法律ニ定メタル證人ノ最少數(第百八十五條)モ亦之ヲ訊問スルコト肯セサルカ如キ皆ナ越權ノ場合ナリトス

然レニ越權ニ附キ故障ヲ爲サンニハ必ス越權ヲ以テ言渡シタル判決ナカル可カラス○法律ニ制定シタル處分ヲ怠タル所ノ越權ニ附テハ未タ故障ヲ爲スコト得サル者トス故ニ例之ハ證據物件ヲ被告人ニ指示セズ又被告人ノ請願ニ背キ臨檢若シハ家宅搜索ノ處分ニ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

立會ハシメサルカ如キ是ナリ

是等ノ場合ニ於テハ被告人又ハ檢察官ト雖モ後文記スルカ如ク豫
審終結ノ命令ニ對シテ而已故障ヲ述フルノ權利ヲ有スルナリ
又法律上制定スル場合ニ於テ(第百八十二條)判事拘留狀ノ出發ヲ拒
ミ政府ノ目代ノ請求ニ背キ(第百七十三條)土地ノ臨檢家宅搜索又ハ
證據物件ノ差押等ヲ拒絕シタリト雖モ直接ノ故障ヲ爲スヲ得ス
何トナレハ唯^{アクト・ボジターフ}有的ノ所爲ノミニ對シテ故障ヲ述フルヲ得ルモ右
ノ如キ拒絕ニ附テ故障ヲ爲スヲ得サレハナリ○又第百八十二條
ノ場合ニ於テハ終結ノ命令ニ對スルモ故障ヲ爲スヲ得ス但シ豫
審判事ヲ警責スルヲニ附テハ此限ニ在ラス(第七十九條)總テ是等數
多ノ場合ニ於テ終結ノ言渡ニ故障ヲ爲スハ豫審判事ノ怠リヲ改良
セントスル豫審ノ増補ヲ爲サシムルノ有益ナル効力ヲ得ルニ在リ

第二百五十九條

(第三百七十號)口頭及ヒ對質ノ訴訟處分^{公判ノ場合}ニ於テハ概テ上訴
時間ヲ充分制限シ且ツ攻撃ス可キ判決アリタルヨリ起算ス然レモ
法律上豫審ノ場合ニ於テハ何時ニテモ(看第二百五十八條第一項)故
障ヲ爲スヲ許容シタリ蓋シ其理由タル若シ其處分ニ瑕瑾アレハ
則チ之ヲ改正スルヲ太タ便宜トナシ敢テ其瑕瑾ノ附着シタル儘ニ
看過シテ到底其處分ノ全部又ハ一部ヲ取消スニ至ルノ煩ヲ免レン
カ爲メナリ

故障ヲ爲スノ法式ハ其他ノ上訴ニ附キ定メタル者ト概シテ同一ニ
シテ即チ攻撃ス可キ判決ヲ下シタル法廳ノ書記局ニ申立ヲ爲フナ
リ實際上訴ヲ爲スニハ豫審判事ノ關スル裁判所ニ向テ之ヲ履行ス
ル者ナレハ其裁判所ノ書記局ニ於テモ亦其上訴アルヲ知ラサル

可カラス然レヒ斯ノ如キ意義アルヲ以テ書記局ニ故障ヲ申立ルニ非ス唯、其豫審法廳ノ書記局ナリト云フヲ以テナリ

故障人ハ唯、其中立ヲ爲スノミニ非スシテ亦己レカ基ツク所ノ方法書ヲモ同時ニ差出スヲ得若シ之ヲ同時ニ差出サ、ルニ於テハ三日内ニ之ヲ差出ス可シ(第二百七十八條)然レヒ毫モ之ヲ差出サ、ルヲ有リ此場合ニ於テハ其故障ハ之ヲ豫審ヲ遷延スルノ方法ト看做サ、ルヲ以テ充分ナル調査ナク棄却ヲ受ルニ至ルノ危険アル可シ

若シ被告人故障ヲ爲シタル時ハ檢察官ハ書記局ノ通知ニ由リ其旨ヲ領知ス可シ若シ又檢察官故障ヲ爲シタル時ハ被告人ハ其答辯ヲ爲サンカ爲メ同一ノ手續ニ因リ故障書ノ謄本ヲ受ケ取ル可シ

〔第三百七十一號〕 抑、故障ハ被告人ノ方ヨリ濫リニ之ヲ爲シ且ツ豫

審處分ヲ妨碍スルノ目的ニ出ル者多キニ居ルヲ以テ概テ故障ニ因テ其處分ヲ中止スルヲナシ○然レヒ茲ニ一箇ノ例外アリ即チ檢察官ヨリ假釋ノ言渡ニ對シテ故障ヲ爲シ而シテ其故障ハ命令アリシヨリ二十四時内ニ之ヲ爲シタル時ハ假釋ヲ中止ス可シ○斯ル例外ヲ設ケタルハ則チ被告人逃亡ノ危険ヲ恐ル、ニ基キタリ但シ右二十四時ノ遷延アリト雖モ爲メニ左程被告人ニ損害ヲ與フル者ニモ非ス○又被告人ヲシテ其憂苦ヲ幾分カ免カレシメンカ爲メ其者獄舍ヨリ出ルヲ有ル可キノ時其請願ノ勝利成就セル旨ヲ通知スルモ亦不都合アラサル可シ

之ニ反シテ若シ釋放ヲ拒ムノ故障ヲ以テ其命令ヲ中止センニハ認許ス可カラサル程ノ奇怪ナル果効ヲ生ス可シ故ニ故障ヲ以テ被告人ニ拒ム所ノ者ハ則チ其者ハ假釋ノ謂ヒナリ

令狀及ヒ密室監禁ノ執行ハ共ニ前同一ノ理由ニ因リ當然故障ヲ以テ之ヲ中止スルコトナカル可シ唯、故障ノ審判アルヲ待テ是等ノ處分ヲ免レン而已

第二百六十條

〔第三百七十二號〕 闕席ニテ執行シタル所謂^{プロブレマンゼット}眞ノ裁判ニ關スル時ハ故障ハ其審判ヲ爲セル判事ニ就テ之ヲ爲ス可シ是レ第三篇(第三百九十二條及第四百十四條)ニ記スル所ナリ

然レモ本條ノ場合ニ於テハ故障人ハ更ニ同一ノ判事ニ審判ヲ受ルニ附キ敢テ保障ノ受ク可キ者ナシ何トナレハ假令ヒ故障人ハ趣意書ヲ差出シテ即チ之ニ依テ訊問セラル、コト有リトスルモ尙ホ其審判ハ之ヲ公示スルコトナキヲ以テナリ

是ヲ以テ法律ハ故障ノ裁判ヲシテ豫審判事ノ屬スル裁判所ニ命シ

タリ而シテ尙ホ未ダ公ケノ辯論アラサルヲ以テ裁判所ハ「會議局」^{公判}廷ニ於テ公判ニ集會セリ○此場合ニ於テハ甚クモ三名ノ判事ノ出席ヲ必要トセリ○但シ豫審判事ハ其會議ニ與ラサルコト勿論ナリ(第五十五條)

故障ハ假令ヒ被告人ニ不利ノ時ト雖モ攻撃ヲ受ケタル處分ノ執行ヲ中止ストノ理由ト之ニ反シテ被告人ニ假釋ヲ與フル時ハ此執行ヲ中止スト云フ理由トノ二箇ノ理由アルヲ以テ裁判所ハ成ル可ク速カニ會議局ニ於テ集會スルヲ要ス

故障ニ附テ請願人タリ若クハ防禦人タル被告人ハ唯、其趣意書ヲ差出ス而已ニテ(第二百七十八條)敢テ自身訊問ヲ受クルニ非ス○故障人タリ若クハ其防禦人タル檢察官ハ書面ヲ以テ其論結ヲ差出ス可シ是レ自カラ出席セサルコトヲ證スル者ナリ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

會議局ノ判決ニ對シ控訴ヲ爲シ然ル後チ又上告ヲ爲スニ由リ豫審處分ヲ中止スル者ナリトスル時ハ重劇ナル不都合ノ生スルコアリ
 ○故ニ豫審處分ハ假リニ之ヲ執行シ而シテ豫審判事ノ最終ノ命令即チ其終結ノ言渡ト共ニスルニ非サレハ右等ノ上訴ヲ爲スコト得ス

此命令モ亦故障ニテ攻撃セラル可シ而シテ該故障ニ附テハ曾テ敗訴シタル者ヨリ其第一ノ方法書(初メ用ヒタル者)ヲ差出シテ利益アリト認ムル時ハ則チ之ヲ差出ス可シ又此者ハ第二ノ故障ヲ審判スル會議局ノ言渡ニ對スル控訴ニ附テモ亦斯クノ如ク爲スコトヲ得
 若シ裁判所ニ故障ヲ棄却スル時ハ其攻撃ヲ受ケタル處分ハ其儘ニ保持セラレ而シテ豫審ノ繼續アル者トス○又其故障ニ係ル處分ヲ取消シタリト雖モ之カ爲メ豫審ヲ中止スル者ニ非ス而シテ此故障

ニ關スル處分ヲ要スル時ハ再ヒ成規通りニ之ヲ履行ス可シ若シ又法律上之ヲ希望セス又ハ之ヲ禁止スル時ハ則チ再行セサルコト有ル可シ

然レモ判事ノ管轄違ノ場合ニ於テハ必ス直ニ豫審處分ヲ中止ス可シ而シテ判事猶ホ其管轄違ナリトスル會議局ノ決定ニ循ヒ豫審終結ノ言渡ヲ猶豫ナク行ハサルニ於テハ即チ越權ノ罪アリトス

第二百六十一條

〔第三百七十三號〕 既ニ豫審判事其管轄違ノ事件ヲ審理シタルチ緊要トセハ又二名ノ判事互ニ相管轄シ同一事件ヲ審理スルノ弊ヲ避ク可キヤ固ヨリナリ

此數箇ノ管轄ノ場合タル之ヲ佛法ニ比スルニ更ニ僅少ナル所以ノ者ハ別ニ犯罪ノ地ヲ以テ管轄ト定メタル原則ヲ設ケタレハナリ然

レ此第一篇(總)則第四十二條以下ニ記セルカ如ク或ハ數所ニ於テ一罪ヲ連犯シ而シテ其犯所ノ不確定ナルコト有リ又時トシテハ犯人捕獲ノ地ノ判事ヲ以テ管轄ト定ムルコト有リ

是ヲ以テ二名ノ判事同時ニ同訴訟ニ干與スルコト有ル可シ、法律上ノ用語ニ於テ之ヲ有^{ボシチ}的管轄^チ抵觸ト云ヒ之ニ反スル者ヲ無^チ的管轄^チ抵觸ト云フ即チ一名ノ判事タモ之ヲ己レノ管轄ナリト信セス且ツ法廳ノ進行停止セラル、ニ至ル(第六百四條以下)者ニ反對スル者ナリ〇一箇ノ犯罪事件ニ附キ一箇ノ場所ニ於テ其豫審ヲ爲シ直ニ之ヲ他ノ場所ノ輕罪裁判所ニ訴へ又或ハ其事件他所ニ於テ豫審ヲ爲セシ後ヲ業ニ已ニ重罪審院ニ送付セルコト有ル可シ〇同一事件ニ附キ管轄抵觸ノ起ルニ非スシテ附帶相連結スル二箇ノ事件ニ附キ管轄抵觸スルコトモ亦アル可シ

總テ是等ノ場合ニ於テハ判決ノ二途ニ出テ且ツ法廳ノ規定ノ進行ニ障碍ヲ爲スノ恐レ有リ

右ニ述フル如ク一箇ノ事件ニ附キ二箇ノ訴訟并起ル時若シ法律ニテ其着手ノ時及ヒ其審理繼續中ニ於テ之ヲ停止セサル時ハ遂ニ其決斷ノ齟齬スルカ爲メ往々上告セサルヲ得サルニ至ル可シ是レ即チ成ル可ク避クルヲ要スル所ナリ

是ヲ以テ更ニ又抗辯ノ憑據即チ辯護ノ方法アリ但シ是レ管轄違ノ爲メニスル者ニ非スシテ管轄抵觸ノ爲メニスルナリ此抗辯ノ憑據ハ判事之ヲ審判ス可シ而シテ其審判ハ憑據ヲ棄却シタルト認許シタルトチ問ハス故障ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得〇判事抗辯ノ憑據ヲ認許シタル場合ト其之ヲ棄却シタル場合トノ差別ハ其之ヲ認許シタル時ハ事件ノ管掌ヲ免カレタルニ非スト雖モ必ス審理ヲ中止

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ス之ニ反シ其憑據ヲ棄却シタル時ハ毫モ之ヲ顧眷セス依然トシテ豫審處分ヲ繼續スル是ナリ○是ヲ故障第五ノ場合トス

〔第三百七十四號〕此場合ニ於テ吾人ノ注目ス可キ者アリ則チ前四箇故障ノ場合ハ唯、檢察官ト被告人トニノミ之ヲ附屬シタリト雖モ第五ノ場合ハ民事原告人ニモ亦之ヲ屬スルナリ

實ニ民事原告人モ亦適正ノ利益アリテ其干與スル訴訟事件ノ判決齟齬セサランコトヲ欲スルヤ敢テ喋々チ俟タサルナリ

右ニ記スル第五ノ場合ノ故障モ亦前四箇ノ故障ニ於ケルカ如ク裁判所ノ會議局ニ之ヲ爲ス者トス

第二百六十二條

〔第三百七十五號〕判事牴觸ノ抗辯ノ憑據ヲ棄却スルハ其受理スル所ノ事件ヲ以テ他ノ判事ノ既ニ審理セル事件ト同一ニ非スト思考

スルニ由ルナリ○然レモ是ヲ以テ牴觸アリト信シテ疑ハサルノ人ハ其主張スル所ヲ固執シ得可シ故ニ此者ハ判事ノ決定(看附言)ニ對シテ故障ヲ申立ルナリ

〔附言〕茲ニ「チルドンナンス」命令ノ名稱ヲ用ヒサルハ本ト判事ノ命令ニ非スシテ唯、其抗辯ノ憑據ノ基ク所ナシト明言シ之ヲ顧眷セ

サルニ因ル

會議局ニ於テモ亦果シテ他ノ判事他ノ裁判所ニ於テ同一事件ヲ受理シ又ハ充分中止ヲ要スル程ノ附帶事件ナルヤ否ヲ調査ス可シ○然レモ會議局ノ論定ソレニシヨシタル假令ヒ其如何ナル善良ヲ盡シタル者ト雖モ亦確定ノ判決タルヲ得ス凡ソ有的管轄牴觸ノ問題起ルヤ必ス二箇又ハ數箇ノ裁判所ニ於テ同一事件ノ受理アルヲ想像ヒサル可カラス而シテ此問題ハ終結判定シ得可キノ裁判所ハ獨リ是等牴觸裁

判所ノ上位ニ立テ且ツ是等裁判所ヲ己レカ管轄内ニ入ル程ノ者ニ非サレハ之ヲ能スルヲ得ス○此目的ニ於ケル決定ヲ稱シテ裁判管轄規定一ニ管轄規定ト譯スト曰フ而シテ此事ハ後文第三篇公判廳ノ場合(第三百二十二條以下)ト第四篇大審院ノ緊要ナル職掌トヲ記スルニ至テ更ニ説ク所アル可シ

アットリビエツシヨシ

茲ニハ唯豫メ牴觸ノ結局ハ如何ナルヤヲ左ニ記セントス
若シ會議局ニ於テ其申立ル所ノ管轄牴觸ノハ果シテ眞實ナリト認ムル時ハ管轄裁判所ニ於テ其判決ニ至ル迄ハ已ニ着手シタル豫審處分ヲ中止ス可キヲ豫審判事ニ命ス可シ
其間ハ諸事其儘ニ差置ク可シ即チ若シ被告人繫留ヲ受ケタル者ナレハ其儘監獄ニ差置ク可シ若シ假釋ヲ受ケタル時ハ是亦其儘タル可シ然レモ判事ハ管轄違ノ時ニ於ケルヨリハ更ニ權利ヲ有スル

や

者トス是ヲ以テ判事ハ被告人ニ保證ヲ命シ又ハ命セスシテ之ニ自由ヲ附スルヲ得蓋シ夫ノ管轄違ノ場合ニ於テノ如ク豫審處分ヲ無効トスルヲナキニ因ル管轄違ノ場合ニハ保證ヲ命シテ釋放スルヲ得ス又判事ハ急速ヲ要スル處置ヲ下サ、ルヲ得サル時ハ則チ拘留狀ヲ發スルヲ得、又法律上允許スル所ニ循ヒ急速ヲ要スル檢證處分ヲモ爲シ得可キ者トス

若シ被告人拘留狀ヲ受ケ又ハ之ヲ保持セラル、時ハ人或ハ該令狀ノ爲メ二十日ノ最高期限ヲ定メタル第四百四十一條ノ利益ヲ被告人ニ得セシム可キヤト問フ者アラソ○然レモ被告人ヲシテ此利益ヲ得セシムルハ難カル可シ即チ被告人ヲシテ訴訟ヨリ生スル不良ノ方向即チ不良ノ處分ノ爲メニ困苦セシムルヲ得サルノ故ト又被告人ハ常ニ速カニ管轄法廳ノ受理ヲ求ムルニ難カラサルノ故トニ因

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

リ第四百四十一條ハ之ヲ管轄違ノ場合(看第二百四十二條註解第三百四十九號)ニ適用スルヲ得ルモ左ノ數箇ノ理由アルニ由リ茲ニ之ヲ利用スルヲ得サルナリ其理由ニ曰ク

第一 被告人ヲ繫留シタル場所ノ檢察官ニ過失ノ責メヲ歸スルヲナキ事

第二 被告人ニ拘留狀ヲ發シタル判事毫モ第四百四十一條ニ循ヒ拘留狀ヲ收監狀ニ變更スルノ分限ヲ有セサル事

第三 被告人自カラ確然タル管轄ヲ定ムル所ノ裁判管轄規定ヲ請求シ得ル事

若シ之ニ反シ會議局管轄牴觸スルヲナシト認ムル時ハ則チ豫審ヲ繼續ス可キ旨ヲ命ス可シ但シ請願人ノ方ヨリ直接ニ上等法廳ニ管轄規定ヲ求ムルハ此限ニ在ラス

法律上此管轄規定ノ請願ハ直接タルヲ要ストセリ即チ此請願ハ上等法廳ノ書記局ニ請求書ヲ差出ス可シトノ意味ニシテ會議局ノ判決ニ對スル上訴ノ法式ニ據ル可シトノ意味ニハ非ス蓋シ此上訴ハ同一ノ裁判所ノ書記局ニ請願スルヲ以テ其法式ト爲セリ○即チ其控訴タラサルヲ證スルニハ往々管轄規定ノ請願ハ次條及ヒ後條(第三百二十一條)ニ於テ見ルカ如ク最初ヨリ(羅句語ニテ之ヲ「デ、プラノ」ト云フ)之ヲ大審院ニ爲ス是ナリ

第二百六十三條

(第三百七十六號) 管轄規定ヲ審判スル爲メノ管轄法廳ヲ確定スルニ附キ憑據ス可キ原則ニアリ、第一、斯ル法廳ハ牴觸スル數箇ノ裁判所ヨリ更ニ上等ナルヲ要ス、第二、此法廳ハ等シク牴觸スル雙方ノ裁判所ヲ己レカ管轄内ニ抱含シタル者ナルヲ要ス故ニ本條ニ豫定ス

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ルカ如ク往々大審院ニ請求スルニ至ルナリ

第二百六十四條

〔第三百七十七號〕豫審中故障ヲ爲スニ附キ第六ノ場合即チ本條ハ即チ法律ニ列記スル數多ノ原由ノ爲メ豫審判事ヲ拒謝スル（即チ拒絶スル）ノ方法はナリレツギユセー

抑判事ヲ拒謝スルハ判事タル者其事件ヲ審判スルニ際シ公明ノ裁判ニ必要ナル公平ト不羈獨立トヲ缺クノ恐レ有ルニ基ク者ナリ
拒謝ハ一切ノ訴訟關係人各其利益ノ爲メ之ヲ開始スル者トス
拒謝ノ第一ノ場合ハ判事又ハ其妻ト被告人又ハ民事原告人トノ間
血屬又ハ姻屬ノ關係アル時はナリ○若シ判事又ハ其妻ト被告人ト
ノ間ニ血屬親ノ關係アル時ハ拒謝ヲ申立ル者ハ多分檢察官カ又ハ
民事原告人ナリ○又民事原告人ト關係アル判事ノ偏頗ヲ恐ル、者

ハ則チ被告人ナリ併シ檢察官タル者ハ公明ナル裁判ヲ維持センカ
爲メ常ニ拒謝ヲ爲スコトヲ得
離婚ノ後ト雖モ兒子ノ有無ニ附キ區別ヲ設ケタルハ聊カ注意ヲ要
スル而已

拒謝ノ第二ノ場合モ亦自カラ證明ス可シ但シ此場合ニ於テハ判事
自カラ後見人タル時ニシテ其近親ノ後見人タル時ニ非サルコトヲ注
目ス可シ

其第三ノ場合モ亦獨リ判事ノ自カラニ限り適用ス可シ○尤モ判事
自カラ訴訟事件ニ附キ證人トシテ訊問ヲ受クルコトアルハ甚タ稀レ
ナリ蓋シ現行犯ノ場合ニ於テ初メ他ノ判事又ハ司法警察官豫審處
分ヲ爲シタルノ時ニ在リ

第四及ヒ第五ノ場合ニ於テハ公平上ノ點ニ附キ甚タ不都合ノ事即

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ナ判事偏頗ノ處置ナキニ非サル可シト想像スル者ナリ此場合ニ於テハ審ニ判事而已ナラス其妻及ヒ血屬近親又ハ姻屬ヲモ含有セリ第六ノ場合ハ贈物ヲ受ケタル者ヲ云フ而シテ唯判事ト其妻トニ止マリ敢テ其他ノ者ニ及ホスコナシ○斯ノ贈物ハ賄賂ノ未遂犯ノ性質ヲ有セサルコトヲ想像セリ又然ラサルヲ得サル者トス何トナレハ若シ其性質ヲ帶ヒタル時ハ判事ハ審ニ拒謝ヲ受ルノミナラス尙ホ其職ヲ免セラレ且ツ重刑ニ處セラル可キ者ナレハナリ○總テ是等拒謝ノ場合ハ全ク佛蘭西治罪法ニ虧缺スル所ナリ○但シ民事ノ訴訟法ニ此虧缺ヲ補ヒタリ(第三百七十八條以下)

第二百六十五條

(第三百七十八號) 拒謝ヲシテ其効ヲ保セシメントスルニハ必ス其他ノ故障ノ場合ニ於ケルカ如ク攻撃ヲ受ル判事ノ處分ナカル可カ

ラス○是ヲ以テ拒謝ヲ希望スル者ハ先ツ其原由ト其基ク所ノ方法トヲ以テ書記局ノ手ヲ經テ而シテ其請求書ヲ判事ニ差出ス可シ事ノ遅延ト無益ノ法式トヲ避ルカ爲メ法律ニテハ二十四時内ニ判事其請求書ニ附テ答辯セノコトヲ欲セリ該請求書ノ原本二通ノ有益ナルコトハ本條ノ條例ニ就テ自カラ明カナリ

第二百六十六條

(第三百七十九號) 法律ハ先ツ判事拒謝ヲ肯セサル旨ヲ以テ其請求書ニ答フルコトヲ想像セリ○此決定ハ之ニ對シテ故障ヲ爲スコトヲ得蓋シ其故障ハ通常ノ法式ヲ以テ之ヲ會議局ニ爲ス可シ裁判所ニ於テハ判事ノ辯明ヲ聽キ而シテ檢察官ノ論結ヲ請ヒ以テ審判ヲ下ス可シ但シ判事ト檢察官トノ面前ニ於テス可シ

〔第三百八十號〕 拒謝セントスル請願並ニ故障アリト雖モ之カ爲メ必ス豫審ヲ停止スル者ニ非サルハ固ヨリナリ但シ判事豫審終結ノ命令ヲ爲サ、ルハ此限ニ在ラス

然レモ豫審處分ヲ中止スルト否トヲ査定スルハ一切判事ノ審判スル所ニ委ヌ○判事ノ見ル所ニ於テ拒謝ハ正當ナル理由ニ基クカ如ク且ツ姑ク其豫審處分ヲ遲滯スルモ敢テ危難（看附言）ナシト信スル時ハ判事之ヲ中止スルヲ以テ良シトス可シ

〔附言〕 羅旬語ニテ之ヲ「ペリキユローム、イン、モラー」ト云フ將ニ來ラントスル即チ待ツニ於テノ危險ノ意義ナリ
ア、アツタンドル
ダシゼー

第二百六十八條

〔第三百八十一號〕 本條ノ條例ハ第二百六十條ノ條例ト同一ナリ然

ルニ法律ノ更ニ之ヲ説明スルハ場合ノ重要ナルニ由リ聊カ疑團ヲ生スルノ恐レ有レハナリ但シ被告人ノ方ニ在テハ唯、豫審處分ヲ遲延スルノ目的ノミヲ以テ是等上訴ノ方法ヲ濫用スルノ恐レ常ニ之レ有ル所ナリ

檢察官ト民事原告人トノ方ニ於テハ之ヲ濫用スルノ恐レ有ルヲナシト雖モ法律ノ大意罪ヲ蒙ラシメントスル者ト之ヲ防禦セントスル者トノ間ニ權衡ヲ保ツニ在ルヲ以テ檢察官民事原告人共ニ本條ノ規則ニ循ハサルヲ得ス○判事ハ此上訴ニ附キ所働ノ地位ニ在ル者ナレハ會議局ノ決定ヲ攻撃スルヲ得サルヤ固ヨリナリ

第二百六十九條

〔第三百八十二號〕 判事拒謝ノ請願ヲ受ケスト雖モ既ニ其拒謝ノ場合中ノ一ニ在ルヲ知リ若クハ法律ニ豫定セサル場合ト雖モ自カ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ラ其公平ナル事ヲ減少シ又ハ多少嫌疑ヲ受ク可キナリト了知セシ
時ハ則チ自身拒謝ス可キノ申立ヲ爲スハ是レ其精細ノ注意ニ委ヌ
ル所ナリ

然レモ二箇ノ場合ニ於テハ判事自カラ之ヲ決定スルコトナク會議局
ニ於テ之ヲ審判ス而シテ其事タル所謂ル眞ノ訴訟ニ非サルヲ以テ
其審判ニ附テハ毫モ上訴スルコトヲ得サル者トス

第二百七十條

〔第三百八十三號〕 本條ニ想像スル所ハ前條ノ場合ニ因リ若クハ其
他訴訟關係人ノ一人ヨリ拒謝ヲ請願シタルニ因リ即チ之ヲ認許シ
タル場合ナリ

拒謝ヲ受ケタル判事ハ直ニ自カラ回避スルヲ要ス○此判事ハ他ノ
判事ヲ以テ之ニ代リ且ツ事件ノ輕重ニ循ヒ拒謝ヲ受ケタル判事ノ

爲シタル全處分又ハ其一部ヲ改行スルコト有ル可シ

第二百七十一條

〔第三百八十四號〕 書記ノ職務ハ判事ノ職務ニ比スレハ稍々尊重ヲ減
スト雖モ猶ホ其檢證調書ヲ屬文シ且ツ總テ重要ナル事件ヲ訴訟關
係人ニ通告スルニ因リ其誠實ナルコトヲ信用セラレテ決シテ疑ヲ受ル
コト有ル可カラズ是ヲ以テ判事ト同一ノ原由ニ依リ拒謝ヲ受ケ又判
事ノ如ク自身意欲上ノ拒謝即チ其隨意^{スポンダー}ニ拒謝ヲ申立ルヲ得ルナリ

第二百七十二條

〔第三百八十五號〕 政府目代ノ職ハ判事又ハ書記ノ職務ニ反シ自カ
ラ與テ判決ニ影響ヲ及ホス法律上ノ處分ハ毫モ之ヲ爲スコトナシ從
テ公平又ハ不羈獨立ヲ失スルノ弊アル可カラサルヲ以テ被告人又
ハ民事原告人ヨリ之ヲ拒謝スルコトヲ得ス

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

然レモ實際^モ理論上ノ影響ト威權トハ甚ク存在スル者ナルヲ以テ第
二百六十九條ニ循ヒ判事ノ如ク亦自身拒謝センコトヲ申立ルヲ得可
シ

裁判所ニ於テ其拒謝ヲ認許シタル時ハ此目代ノ指揮ニ服従スル檢
事補之ニ代ルニ非スシテ裁判官中就中概テ判事補之ニ代ル可シ
若シ拒謝ノ原由獨リ訴訟事件ニ干與スル檢事補一人ニ係リ而シテ
必ス代人ヲ要スル時ハ敢テ之ヲ裁判所ニ申立ルニ及ハス之ヲ政府
ノ目代ニ申立テ其指揮ヲ請フ可シ然ル時ハ該目代之ニ代ル者ヲ指
定ス可シ

第二百七十三條

〔第三百八十六號〕豫審處分中拒謝ニ關スル者ヲ兩處ニ分割スルヲ
欲セサルヨリ法律ハ豫審處分ニ對スル上訴手續ヲ定ムル條例ノ前

ニ於テ拒謝ニ關スル者ヲ定メタリ即チ法律ニ於テハ當ニ豫審處分
ニ關スル故障アリタルニ由リ豫審判事ノ拒謝ヲ審判スルカ爲メ會
議局ニ集會シタル判事而已ナラス是等ノ事ヲ審判スル控訴院ノ判
事ニ附テモ亦拒謝ノ規則ヲ適用センコトヲ認許シタリ
大審院ノ判事モ亦之ヲ拒謝スルヲ得ルト雖モ總テ該院ニ關スル一
切ノ事件ハ第四篇ニ記スルヲ以テ其開説ハ之ヲ該篇ニ讓レリ〔看第
五百七十九條〕

訴訟關係人ノ第五十五條ニ遵守センコトヲ請願シ得ルモ亦此拒謝ノ
方法ニ因レル者トス該條ニ於テハ豫審處分又ハ訴訟手續ニ干與シ
タル判事ハ該件ニ對スル上訴ヲ審判ス可キ法廳ニ於テ之ニ參與ス
ルコトヲ禁セリ○斯ノ場合ニ於テハ獨リ拒謝ヲ認許スルノミニ止マ
ラス大審院ニ上告スルコトヲモ得可シ〔第五百三十二條第二項〕然レモ

此場合ニ於テ判決ヲ改良スルヨリハ鞏口之ヲ無効トスルノ勝レルニ若カサルナリ

第二百七十四條

〔第三百八十七號〕 本條ニ引用シタル前數條ニ於テ豫審判事終結ノ五箇ノ命令ヲ爲ス可キコトハ吾人ノ既ニ説キシ所ナリ即チ豫審判事「管轄違」ナリト稱スル命令「繼續ス可キ場所ナシ」ト述フル命令及ヒ公判廳ノ一ニ「送付ス可キ」三箇ノ命令是ナリ
此命令ハ皆チ檢察官之ニ故障ヲ爲スコトヲ得何トナレハ其命令タル或ハ被告人ノ利益トナリ或ハ之カ害トナルニ拘ハラズ常ニ公益ニ關スルコト有ルヲ以テ檢察官ニ於テ其決定正當ヲ得スト思料シタル時ハ則チ之ヲ攻撃シ得ルハ緊要ノコトナレハナリ

第二百七十五條

〔第三百八十八號〕 民事原告人モ亦故障ヲ爲スノ權利ヲ有セリト雖モ該權利タル之ヲ檢察官ノ權利ニ比較スレハ稍減殺ヲ覺ユ
法律ニ於テハ先ツ民事原告人ノ利益ニ甚ク損害ヲ受ク可キ三箇ノ場合ニ附キ故障ヲ爲スノ權ヲ付與セリ

第一 判事其管轄違ナリトノ命令ヲ下シタル時○此場合ニ於テ民事原告人ハ判事ノ管轄違ナリト稱スルハ不當ニシテ反テ其管轄ナリト主張シ殆ント裁判ヲ拒ムノ罪アリト申告ス
民事原告人ハ被告人ト異ナリ豫審中判事管轄違ノ申立ヲ棄却シ反テ其管轄ナリト爲ス命令ニ對シ之ヲ攻撃スルコトヲ得ス(第二百五十八條第一項)蓋シ此場合ニ於テハ民事原告人ハ豫審終結ヲ待ツ可シ然ル時ハ後文ニ於テ記スルカ如ク其管轄違ノ事ハ己レカ故障ヲ述フル方法トナル可キナリ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

第二 若シ被告人訴ヲ免スルノ言渡ヲ受ケタル時ハ民事原告人ハ己レカ請求スル所ノ賠償ニ附キ故障ヲ爲スヲナク其賠償ヲ請求スルニ附テ基ク所ノ方法ヲ失フハ即チ是レ曲事ニ出ル者ナリトノ故障ヲ述フルコト有ル可シ何トナレハ此場合ニ於テ民事原告人ハ民事裁判所ニ對シ爲ス所ノ賠償ノ訴權ハ之ヲ保存スル者ナレハナリ(第七條第二項)

第三 若シ被告人違警罪裁判所ニ送付セラレ、ノ言渡ヲ受ケタル時ハ民事原告人ハ其性質元ト違警罪ヨリ一層重劇ナリト申立ル犯罪ニ附キ其賠償ヲ請求スルニ於テ違警罪裁判所ニ出ルハ更ニ其保障ヲ減殺スル旨ヲ主張スルヲ得可シ
之ニ反シ事件ヲ輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ送付スルノ命令ニ對シテハ民事原告人ヨリ故障スルコトヲ得可カラサルヲ以テ原則トセ

リ〇蓋シ此二箇ノ場合ニ於テハ民事原告人ノ利益完全保護セラレルルヤ明カナリ

民事原告人此二箇ノ命令ヲ攻撃セントセハ例之ハ第二百四十六條ニ反シ重罪審院ニ送付スルノ場合ニ於テ尙ホ假釋ヲ附屬セシ事實ノ如キ即チ己レカ權利ニ有害ナリト信スル越權アリト主張シ若クハ豫審判事ノ管轄違又ハ送付スル所ノ法廳ノ管轄違ナリト申立サル可カラス但シ管轄違ノコトハ犯罪ノ地ノ故ニ因リ若クハ被告人ノ身分ノ故ニ因ラサル可カラス何トナルニ犯罪ノ程度ニ因テ管轄違ナルコト即チ判事ノ認ムル所ハ輕罪ナルモ其實尙ホ一層重劇ナル重罪タリト信シ乃チ送付法廳ノ管轄違ナルコトハ之ヲ主張シ得サルモ之カ爲メ民事原告人ニ損害ヲ受ルコトナシ何トナレハ輕罪裁判所ニ於テモ亦常ニ損害ノ事實ノ審判ヲ得ルニ難カラサル而已ナラス若

シ此裁判ニテ未タ満足セサル時ハ則チ尙ホ上訴ノ方法ヲ有スル者ナレハナリ

第二百七十六條

〔第三百八十九號〕 被告人ニ於テモ亦己レカ利益ニ關スルニ非サルヨリハ決シテ豫審判事ノ命令ニ對シ故障ヲ爲スヲ得サル可シ故ニ先ツ免訴ノ言渡ニ就テハ其故障ヲ爲スヲ得ス又違警罪裁判所又ハ輕罪裁判所ニ送付スルノ命令ニ就テモ故障スルヲ得サルヲ以テ原則トス何トナレハ是等ノ法廳ニテ辯護ヲ爲スハ簡易ニシテ且ツ時日ヲ費スヲ最モ僅少ナレハナリ之ニ反シ重罪審院ニ送付スルノ言渡アリタル時ハ獨リ名譽ヲ損スルノ甚シキ而已ナラス兼テ許多ノ日時ヲ消費セサル可カラズ加旃自己ノ冤ヲ伸ヘントシ或ハ唯ニ輕罪若シハ違警罪ヲ犯シタルニ過キスト主張スル者ニ就テハ

陪審ノ審理ニ附スル以前ニ於テ猶ホ豫審處分ニ對シテ一切ノ上訴ヲ爲スノ權利アレハナリ

其他送付ノ二箇ノ場合ニ於テハ被告人ハ犯所ノ故ニ因リ若クハ己レカ身分ノ故ニ因ルニ非サレハ豫審判事又ハ送付ヲ受クル法廳ノ管轄違ニ附キ故障スルヲ得ス被告事件僅ニ罰金ニ過キサル場合ニ於テ判事假リノ拘留ヲ保持シ又ハ保證ヲ命シテ自由ヲ與ヘタル事實ノ如キ總テ被告人ニ損害ヲ釀シタル判事ノ越權ニ對シテハ此被告人常ニ故障ヲ爲スヲ得

第二百七十七條

〔第三百九十號〕 故障ヲ爲スノ期限ハ成ル丈ケ之ヲ短縮ニセリ故ニ故障ヲ爲スノ權利アル者ニ對シ僅カニ二十四時間ヲ屬セシ而已其起算ノ點ニ就テハ或ハ差異アリ即チ被告人ト民事原告人トニ附

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

テハ命令書ヲ送達シタルヨリ起算ス蓋シ若シ此送達ナキ時ハ被告人民事原告人ハ其命令ヲ知ラサル可キニ由ル○檢察官ニ附テハ命令書ノ原本ヲ之ニ交通スルヲ以テ足レリトス何トナレハ檢察官ハ常ニ其事件ノ繼續ニ關スルヲ以テ其意見ハ未タ命令アラサル前既ニ成レハナリ

第二百七十八條

〔第三百九十一號〕豫審判事ノ命令書ハ謄寫費ヲ省ク爲メ其原本ヲ以テ之ヲ檢察官ニ交通ス故ニ檢察官ハ其故障ヲ爲ス可キ旨ヲ該原本ニ記入ス

然ル後テ其命令書ノ謄本ヲ被告人及ヒ民事原告人ニ送達ス是ヲ以テ併セテ檢察官ノ故障書ノ謄本ヲモ受取ル者ナリ
被告人ヨリ故障ヲ爲シタル時ハ書記局ノ書面ヲ以テ其旨ヲ檢察官

ニ通知シ且ツ民事原告人ニモ其法式通りノ送達ヲ爲ス可シ斯ク兩人ニ報知スル所以ノ者ハ其故障ニ附キ防禦ヲ爲シ得可カラシムルニ在リ民事原告人ノ故障ニ附テモ亦斯ノ如ク檢察官ト被告人トニ通知ヲ爲ス可シ

故障請願人并ニ其防禦人ハ各別々ニ趣意書ヲ以テスル防禦ノ方法ヲ差出スカ爲メ本條ニ記スル所ノ猶豫期限ヲ有ス但シ其日限ハ起算ノ點ニ差別アリ即チ請願人ニ就テハ故障期限ノ起算ノ點ハ其故障ヲ申立タル日ヨリ數フルヲ至當トス又其防禦人ノ方ニ於テハ故障人ト同一ニ起算セス即チ故障人ヨリ出シタル趣意書ノ謄本ノ送達ヲ受ケタルヨリ數フ可シ否ラサレハ防禦人ハ有益ナル防禦ヲ爲シ得サルナリ○又書記ニ於テ故障ノ方法ヲ含有スル趣意書ト共ニ其故障書ヲ送達スルモ之ヲ以テ法律ニ背反シタル者ト謂フ可カラス

第二百七十八條ノ二

〔第三百九十二號〕法律ニ於テハ防禦人ニ屬スル猶豫期限内ニ故障人ナシテ其故障方法ニ増加スルノ權利ヲ得セシムルヲ拒絕スルノ理由ナシ

又法律上假令ヒ期限ニ後ル、附帶ノ故障ナリト雖モ防禦人ニ對シテ之ヲ爲スノ權利ヲ妨クルヲ得ス何トナレハ一旦裁判所ニテ一箇ノ故障ヲ受理スル以上ハ二箇ノ故障ヲ判定スルニ毫モ不都合ナキ而已ナラス愈々其事件ノ眞實ヲ得レハナリ○控訴ニ對スル防禦人ノ爲ス可キ附帶ノ控訴(第二百八十六條及第四百一條)ト又附帶ノ上告(第五百三十四條)トハ之ヲ後文ニ説ク可シ○故障防禦人最初抵拒セサリシ所ノ命令ニ對シ更ニ之ヲ攻撃スルヲ有リト雖モ之カ爲メ豫審ヲ遅延セントノ目的ナル可シトノ嫌疑ヲ蒙ルヲ有ル可カラス

且ツ其對手人自カラ承諾セサリシ命令ヲシテ之ヲ此防禦人ニ承諾セシムルノ義務ヲ負ハシムルヲ得サルナリ

但シ故障ノ濫用ヲ避ケンカ爲メ法律上注意シテ新舊故障人共更ニ猶豫期限アルヲナキ旨ヲ加ヘタリ

裁判所モ亦其權利ヲ擴張セルヲ見ル可シ則チ裁判所ハ其職權ヲ以テ豫審判事ノ命令ヲ取消スヲ得サルモ既ニ善良ナル法式ヲ履行シタル故障事件ヲ管掌スル以上ハ故障ノ主從ヲ問ハス未タ嘗テ故障ヲ以テ申出サ、リシ原由ノ爲メニハ命令ヲ取消スヲ得ルナリ而シテ其原由ハ公ケノ秩序ニ基クテ以テ足レリトス

第二百七十九條

〔第三百九十三號〕抑、豫審終結ノ命令ハ未タ上訴ノ方法ヲ盡サ、ルニ先ツ之ヲ執行スル時ハ重劇ナル不都合アルヲ免カレズ例之ハ事

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

件ヲ三箇ノ公判廳ノ一ニ送付スルノ命令アリタルニ由リ被告人
 チ茲ニ送付シ而シテ取消トナル可キ裁判ヲ受クルコト有ルハ豈ニ
 不道理ト云ハサルヲ得ンヤ又之ニ反シ訴ヲ免カレシムルノ命令ア
 リタルニ由リ被告人ヲ放免スル時ハ此者更ニ追捕ヲ受ク可キ者ト
 ナルモ恐クハ復タ法網ニ罹ルニ由ナキノ危害アル可シ○此理由ア
 ルニ因リ既ニ第二百五十一條ニ於テ被告人ハ何レノ場合ト雖モ檢
 察官ノ故障ヲ爲ス可キ期限二十四時間ヲ故障ナク經過シタル後ニ
 非サレハ之ヲ釋放ス可カラスト定メタリ
 又判事其管轄違ナリト稱スル命令ノ場合ニ於テハ至急ニ之ヲ執行
 スルコトナキヤ明カナリ何トナレハ其執行トハ即チ檢察官更ニ他ノ
 法廳ニ訴ヲ爲スノ謂ヒコシテ何レノ場合ニ於テモ故障ヲ爲スノ期
 限ヨリ一層時日ヲ費ス可キ者ナレハナリ

第二百八十條及第二百八十一條

〔第三百九十四號〕豫審終結ノ命令ニ對スル故障手續ハ前既ニ掲ケ
 タル他ノ故障手續ト異ナルコトナシ即チ本案釋放若クハ身體繫留ニ
 附キ原被ノ趣意書、檢察官ノ論決書及ヒ會議局ノ決定ヲ要ス
 決定ノ原本ヲ檢察官ニ交通シ及ヒ其謄本ヲ其他ノ訴訟關係人ニ送
 達スル方法ハ豫審終結ノ命令ニ係ル時ト取テ異ナルコトナシ〔看第二
 百四十九條及第二百五十條〕

第二百八十二條

〔第三百九十五號〕獨リ豫審終結而已ニ對スル故障ニ附テ申渡シタ
 ル命令ハ甚ク短縮ノ期限即チ二日內ニ控訴スルヲ得
 其控訴ハ控訴院ノ刑事局ニ之ヲ爲ス可シ
 法律ニ於テハ會議局ノ命令ニ對スル控訴ヲ認許シナカラ何故ニ豫審

終結ノ命令ニ對シテハ故障ヲ廢棄シテ直ニ控訴スルヲテ允許セサルヤト疑ヒテ容ル、者ナキニシモ非ス蓋シ斯ク直ニ控訴スルヲテ得ルトセハ一箇ノ上訴ヲ省キ從テ時日ト費用トヲ省略スレハナリ然レモ其故障ヲ認許シタルノ理由ハ一ハ控訴院ノ遠隔スルニ由リ一ハ故障ノ判決ヲ以テ豫審判事ノ判決ヲ認可シ又ハ改正スルニ由リ控訴ニ附ス可キ者ヲ大ニ減少ス可キヲ豫見シタルナリ控訴ノ法式控訴ヲ爲シ得可キ人及ヒ控訴ノ由テ起ル原由ハ故障ニ關スル者ト異ナルヲナシ(看第二百七十四條以下)

第二百八十三條

〔第三百九十六號〕故障ト控訴トハ其結果ニ於テ毫モ異ナルヲナシ何レモ命令ノ執行ヲ停止スル者ニシテ假令ヒ假釋ノ言渡ト雖モ亦其執行ヲ停止ス可シ但シ身體繫留ニ係ル者ハ此限ニ在ラス〇抑

假釋ノ者タルヤ一ニ被告人ヲ保護スルノ趣旨ニ出ルト雖モ亦其逃亡セントスルノ弊害ヲ防クヲ必要トスル者ト宜シク調和セサル可カラス〇故ニ假釋ヲ與フルニ附キ檢察官故障又ハ控訴ヲ爲ス時ハ其假釋ノ命令書ヲ檢察官ニ交通シタルヨリ一日間被告人ヲ獄舎ニ差置ク可シ蓋シ是レ檢察官ヲシテ其被告人ニ對シ故障又ハ控訴ス可キ者アルヤ否ヲ審究セシムルカ爲メナリ(第二百五十一條)之ニ反シ豫審判事其命令ヲ以テ被告人ニ假釋ヲ與フルヲ拒ミ又ハ一旦之ヲ與ヘ然ル後之ヲ取消タル時ハ被告人此言渡ニ對シ故障又ハ控訴スルヲ得可シ斯ク故障又ハ控訴ヲ爲シタリト雖モ此言渡ノ執行ヲ停止スルヲナシ(看第二百七十九條)

第二百八十四條

〔第三百九十七號〕故障又ハ控訴ノ權利ヲ有スルモ怠テ之ヲ使用セ

サル者ハ亦大審院へ上告スルノ權利ヲ失フ可シ是レ第三篇(第四百五條及第四百三十條)及ヒ第四篇(第五百三十一條)ニ記スル所ナリ、大審院へノ上告ノ如キハ非常ノ方法ニシテ最上ノ上訴ナルヲ以テ通常ノ上訴ヲ拋棄スル者ニハ之ヲ許サ、ルハ人皆ナ認可スル所ト雖モ故障ヲ怠リテ之ヲ行ハサル者ニ控訴ノ途ヲ閉鎖スルノ理由之レ無キナリ何トナレハ控訴モ亦故障ノ如ク通常ノ上訴タル而已ナラス何人ト雖モ既ニ審判ヲ受ケタル裁判所ニ上訴センヨリハ寧ろ直ニ上等法廳ニ訴フルノ優レルコ若カスト思フ可ケレハナリ○又違警罪裁判所又ハ輕罪裁判所ニ於テ爲シタル缺席裁判ニ就テモ亦同シシ處斷ヲ受ケタル者故障ヲ行ハスシテ控訴ヲ行ヒ得ルナリ(第三百九十七條及第四百二十五條)

然レ此場合ニ於テ控訴人ハ故障ノ期限ト控訴ノ期限トヲ併セテ

有スル者ニ非ス即チ控訴ノ期限ハ故障ノ期限ヲ消滅ス可シ而シテ控訴ノ期限ハ二日ニシテ實ニ故障期限ノ二倍ナリ

第三項ハ毫モ訴訟關係人ノ保障ヲ減殺スルコトナク訴訟手續ヲ簡略ニスルヲ以テ其目的ト爲セリ

第二百八十五條

(第三百九十八號) 控訴人ノ何人タルヲ問ハス其攻撃ヲ受ケタル訴訟手續書類即チ控訴ニ係ル書類ヲ云フヲ控訴院ニ移スハ常ニ政府目代ノ任タリ

政府目代ハ之ヲ控訴院ノ書記局ニ移スニ非スシテ同院ノ檢事長ニ移ス可キ者トス

該目代控訴人ニ非サル時ハ其意見ヲ添ユ可シ若シ控訴人ナル時ハ其意見ハ充分其論結書ニ説明シ有レハナリ

證據物件及ヒ被告人ハ以下第二百八十八條ニ循ヒ控訴院ヨリノ命

アルニ非サレハ之ヲ移送スルコトナシ
又法律ハ拘留ヲ受ケタル被告人ヲシテ攻撃ヲ受ケタル判決ヲ下シ
タル法廳ニ假釋ヲ請願セシムルコトヲ許容シタリ但シ此場合ニ於テ
ハ曾テ豫審判事ヨリ命令ヲ以テ假釋ヲ拒ミタルコトナシ即チ被告人
ヨリ之ヲ請願セシコトナシト想像ス可キナリ

第二百八十六條及第二百八十七條

〔第三百九十九號〕 控訴院ニテ一旦控訴ヲ受理シタル時ハ總テ控訴
スルノ權アル者ハ或ハ其控訴ニ附キ防禦ヲ爲シ或ハ自カラ控訴人
トシテ之ニ干涉スルヲ得而シテ其自カラ控訴人トナリシ場合ニ於
テハ附帶ニ控訴スル者ニシテ「主タル」控訴ト稱スル原控訴ニ對シ防
禦スル者ナリ是レ前既ニ記載シタル（第二十七十八條ノ二）主タル故
障ニ附キ防禦人ヨリ爲ス所ノ附帶ノ故障ノ如ク自カラ附帶ノ名義

ヲ有スル者ナリ

第二百八十六條ノ條例ハ前條例ト同一ノ方法ヲ以テ證明スル者ナ
リ即チ訴訟關係人ノ一人一箇ノ裁判ヲ受ケ全ク之ニテ満足セスト
雖モ將來尙ホ一層不利ナル他ノ裁判ヲ受ルニ優レリトシ以テ控訴
ヲ爲サ、ルコトナキニ非ス然レモ若シ其對手人ニ於テ原裁判ニ服從
セサルコトアルニ於テハ其ヲシテ各自カラ其利益ニ反スル所ノ者ヲ
非難攻撃スルヲ得セシムル亦是レ至當ノ事ト謂フ可シ

〔第四百號〕 法律ハ附帶控訴ノ權利ヲ控訴院附檢事長ニモ付與セリ
何トナレハ檢事長ハ訴訟關係人ノ控訴ニ附キ論結ヲ付ス可キ者ナ
ルヲ以テ其屬官タル原裁判所附檢事ノ慧眼ニ觸レサリシ判決ノ誤
謬憂害ヲ正スヲ得サル時ハ是レ固ヨリ不道理ナル可ケレハナリ○
佛蘭西ニ於テハ檢事長ハ主タル控訴ヲ爲スコトヲ得（佛治、第三百三十五

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

條第九項)然レ日本ニ於テハ之ヲ認許セス何トナレハ豫審判事ノ命令ノ執行ヲ停止スルヲ永キニ過クルヲ有ルヲ恐ル、ナリ
 檢事長ノ附帶ノ控訴ハ原裁判所附政府目代ノ手ヲ經テ之ヲ被告人ニ送達ス可シ此控訴アリタル時ハ被告人ヲシテ其答辯ヲ爲サシムルカ爲メ三日ノ期限ヲ與フル而已ナラス其外距離ノ爲メニ設ケタル期限ヲモ加算ス可シ

(第四百一號) 控訴院ニテ一旦控訴ヲ受理シタル時ハ法律上該院ヲシテ其職權ヲ以テ公ケノ秩序ニ關スル憂害例之ハ越權又ハ犯所ニ關セサル管轄違(犯所ニ關スル管轄違ハ重劇ナルヲ少ナシ)ノ如キ其關係殊ニ大ナル者ハ之ヲ改良スルヲ得セシメタリ故ニ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルニ方リ控訴ヲ爲シテ犯罪事件ハ實ニ輕罪ニ過キサルヲ申立テ又ハ證據ノ完全ナラサル旨ヲ申立ルモ控訴院

け

ニ於テハ前ノ送付ノ言渡ト同一ニ即チ全ク其所爲重罪タルヲ認知スル時ハ或ハ軍事法廳或ハ高等法院ノ管轄ナリト言渡スヲ得可シ(第二百七十八條第二項ヲ比較セヨ)

第二百八十八條

(第四百二號) 控訴院ニ於テハ審ニ豫審ノ適正ナルヤ否ヲ審判スルニ止マラス兼テ證據ノ勢力如何ヲモ審判スル者ナルヲ以テ自カラ豫審ノ増補ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サシムルハ當然ノ事トス○控訴院ニ於テハ此處分ヲ或ハ原裁判所ノ豫審判事或ハ同裁判所ノ他ノ判事ニ命シ又或ハ緊要ナル事實參考ヲ集取シ得可シト思料スル時ハ他ノ裁判所ノ判事ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得
 被告人及ヒ證據物件ヲ控訴院ニ送付スルヲ要スルハ實際甚タ稀ナル可シト雖モ原則上必ス之ヲ認許ス可キ者トス

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

〔第四百三號〕 第二百八十九條ニ豫定スルカ如ク控訴院ニテ新タナル事件又ハ新タナル被告人ニ對シ豫審ヲ爲ス時ハ該院ハ既ニ職權ヲ以テスル起訴ヲ爲シタル者ト謂フ可シ其起訴ヲ爲スノ最モ顯著ナル者ハ後ノ第二百九十二條ニ就テ見ル可シ
抑同一ノ被告人ニ責ヲ負ハシム可キ數箇ノ事件ハ假令ヒ相附帶セスト雖モ刑ノ不併合即チ其混淆ノ規則ヲ適用シ以テ同時ニ之ヲ裁判スルハ實ニ一般ノ利益ナリ(刑法草案第百十二條以下)○又同一ノ犯罪ニ附キ被告人數名又ハ嫌疑ヲ蒙リタル者數名アルモ併セテ之ヲ訴フルハ亦最モ有益ナリトス○蓋シ是等ノ事ハ本條ニ於テ充分詳細ニ記載スルヲ以テ更ニ敷演ヲ要セサルナリ
但シ新タナル豫審處分ハ控訴院ノ職權ヲ以テ之ヲ命シ又ハ唯、檢事

長ノ論結ニ基キ之ヲ命令スルヲ得ルハ是レ吾人ノ注目ス可キトトス○即チ此新處分ハ原裁判所附政府ノ目代モ又民事原告人若シハ被告人モ之ヲ請願スルヲ得サルナリ○是等ノ人ハ唯、新タナル豫審ヲ有益ト思料スル旨ノ意見ヲ提出シ得ルモ該處分ニ附キ己レカ論結ヲ付與スルヲ得ス○檢事長又ハ控訴院ハ是等ノ意見ニ附キ事實ヲ明瞭ニスルヲ有ル可ク又其意見者モ其意見ノ有益ナル可シトノ満足ヲ得ルヲ有ル可シ
若シ原豫審判事又ハ其他ノ判事ニテ豫審處分ノ補缺ヲ爲シタル時ハ更ニ命令ヲ下スニ非スシテ唯、其新タナル處分ヲ爲シタル旨ノ具申ヲ爲ス可シ

〔第四百四號〕 故障ニ關スル控訴院ノ決定ハ裁判所ノ決定ト等シク俱ニ皆ナ豫審ノ判決ナルヲ以テ公廷ニ於テ之ヲ行ハス會議局ニ於

テ履行スル者トス

第二百九十條ハ二箇ノ極點ノ判決ヲ豫定セリ即チ或ハ最初ノ命令
(豫審判事又ハ會議局ノ)ヲ認可シ或ハ新タナル命令ヲ以テ之ヲ取消
ス是ナリ然レモ控訴院ハ最初ノ命令ノ一部而已チ變更シ得ルハ當
然ノコトス

第二百九十一條

〔第四百五號〕 本條ハ重要ナル者ト雖モ法文既ニ詳細ヲ盡スヲ以テ
別ニ敷演スルヲ要セス

若シ控訴ノ判決ニ對シ大審院ヘノ上告ナキ時ハ其豫審ノ決定ヲ履
行シ若シ又當初ヨリ控訴ナキ時ハ前ノ豫審ニテ言渡シタル決定ヲ
執行ス

若シ重罪審院ニ送付スルノ言渡アリタル時ハ事件ノ繼續ヲ爲ス可

キ者ハ檢事長ナリ故ニ公訴狀ヲ屬文シ重罪被告人及ヒ證據物件ヲ
該院ニ移送ス可シ

若シ又輕罪違警罪ノ法廳ニ送付スルノ言渡アリタル時又ハ免訴ノ
言渡アリタル時ハ原裁判所附政府ノ目代共命令ヲ執行ス可シ

第二百九十二條

〔第四百六號〕 本條ニ於テ控訴院ニ付與シタル權利ハ實ニ顯著ナル
者ナリ則チ職權ヲ以テスル起訴ノ權是ナリ此權ハ毫モ上訴ヲ受ル
コナク該院自カラ集會シテ行フ所トス

判事其職權ヲ以テ事件ヲ受理シ併テ之カ處分ヲ爲スコトハ元ト原則
ノ許サ、ル所必ス檢察官又ハ被害人ノ起訴ニ由ル可キナリ然ルニ
控訴院ニ許スニ起訴ヲ命シ檢事長ニ其職務ヲ行フ可キ旨ヲ督促シ
檢事長ノ同意ナキ時ハ該院判事ノ一名ヲシテ檢察官ノ職務ヲ委任

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

スルヲ以テスルヲ見ハ人或ハ驚愕スル者アル可シ
 佛蘭西ニ於テ拿破翁帝第一世ノ發議ニ因リ控訴院ニ此制限外ノ大
 權ヲ付與シタルヲ見レハ復タ驚愕スル者アル可シ蓋シ帝ノ欲スル
 所ハ裁判權ヲ鞏固ヨシ以テ行政權ニ對抗セシメ其偏輕偏重ノ弊ヲ
 制セントスルニ在リ(看第三十一條註解第六十八號)
 此起訴ノ權利ハ佛蘭西治罪法典第二百三十五條、第二百五十條及ヒ
 千八百十年四月二十日ノ法律第十一條ニ設定スル所ナリ但シ其之
 ナ記スルヤ稍、簡短ニ過キタリト謂フ可シ

政治上ノ位地甚タ高シ又ハ顯爵ヲ有シ又ハ其他ノ原由ニ因リ威權
 アル者ニ對シ重罪又ハ輕罪ノ責ヲ負ハシム可キヲ有ルニ方リ檢察官
 ノ控訴院ニ屬スル者ト雖モ猶ホ其起訴スルヲ憚カルヲナキニシモ非
 サル可シ此場合ニ於テ司法卿ヨリ起訴ス可キノ命ヲ下スヲ得ル

ト雖モ卿モ亦或ハ畏懼ノ念ト憚ル所アルヲ以テ爲メニ其命ヲ下サ
 サルヲ有ル可シ○是ヲ以テ控訴院ニ於テハ事件ノ職權ニ依レル起
 訴ヲ爲シ即チ自カラ其事件ヲ取テ其處分ヲ施ス者トス
 總テ是等ノ事ハ高等法院職權ノ起訴ノ事項ニ於テ既ニ注目セル所
 (第百條註解並ニ附言ヲ看ユ)ト雖モ猶ホ未タ陳述セサル者アリ則チ
 右ニ記載スルカ如キ社會ノ保障ヲシテ愈、嚴然有効タラシムルニハ
 他ノ一箇ノ保障即チ判事ノ職任ヲシテ終身官ト定ムルニ非スンハ
 能シ難キ是ナリ何トナレハ此職務ヲ隨意ニ免ス可キ者ト爲スニ於
 テハ檢察官ノ職ニ比較シテ更ニ不羈獨立ノ者タラサレハナリ
 (第四百七號) 職權ヲ以テスル起訴ノ權利ヲ行ハントスルニハ必ス
 控訴院ノ判事ノ一名又ハ數名ヨリシテ重罪又ハ輕罪ノ事件ヲ其院
 ノ長ニ告發ス可シト是レ即チ本條ニ希望スル所ナリ○蓋シ該院ニ

テ判事ヲ集會スルハ院長ノ職權ヲ以テ之ヲ爲ス可ク何レノ場合ニ於ケルモ各判事其職權ヲ以テ集會スルヲ得ス○他又院長自カラ犯罪事件ヲ認知シタル時ハ隨意ニ判事ヲ集會スルヲ得可シ判事ハ更ニ同院ニ於テ法式ニ循ヒ告發狀ヲ作ル可シ
 檢事長ハ右ノ告發事件ニ附キ起訴ヲ始ム可キヤ否ニ附キ己レカ論結ノ請求ヲ受ク可シ

若シ檢事長ニ於テ起訴ス可キ者トスルモ同院ハ必ス之ヲ命スルノ義務ナシ然レモ之ヲ命スルヲ往々之レ有リ之ヲ命シテ然ル後テ其判事ノ一名ヲシテ豫審ヲ行ハシム可シ○此場合ニ於テ控訴院ハ檢事長ノ論結ヲ認可シタル者ト雖モ其判決ハ業ニ已ニ職權ニ依レル起訴ノ性質ヲ有スル者ナリ何トナレハ該院ニテ事件ヲ受理シタルヤ初メニ院長ヨリ召集ノ命アリ而シテ其判事ノ告發アリテ然ル者

ナレハ同院ニ於テハ假令ヒ檢事長論結ヲ付スルヲ拒ミタルヲ有ルト雖モ之ニ拘ハラスシテ其告發事件ニ附キ判決セサルヲ得サレハナリ

此場合ニ於テ非常ノ規則ニアリ即チ控訴院ニ於テ職權ヲ以テ(院長ノ召集スルト該院ニテ豫審ヲ行フト是ナリ○但シ檢事長ハ一旦起訴ヲ求メタルヲ以テ此非常ノ豫審ニ附キ終結檢察官ノ職務ヲ行フ可キナリ

若シ之ニ反シ檢事長ニ於テハ起訴ヲ始ム可キ者ニ非スト論結スルモ該院ニ於テ起訴ヲ必要ナリト思料スル時ハ更ニ普通法ニ反シ自カラ訴ヲ起シ而シテ同院中ヨリシテ審ニ豫審掛判事ヲ命スル而已ナラス又檢察官ノ職務ヲ行フ可キ官吏ヲモ撰拔ス可シ
 極論スレハ斯ル場合ニ於ケル檢察官ノ職務ハ彼ノ佛蘭西ニ於ケル

カ如ク檢事長ニ委スルニ難カラサル可シト雖モ法律ノ本旨ニ背反スルカ如ク又檢事長ニ於テ起訴ス可キノ理由ナシトスルヲ強フルハ其顯榮ヲ傷フルニ類スルヲ如何セン若シ之ヲ強フレハ則チ檢事長其通常ノ職務タル搜索ヲ怠リ而シテ豫審中必要ナル嚴格ノ處置ニ對抗スルノ論結ヲ述フルヲアラン

控訴院ニテ訴ヲ起スニ方リ之ヲ起ス可キヤ否ヤ又之ヲ繼續ス可キヤ否ヲ會議スルハ審ニ刑事局ノ委員ノヨコ止マラス該院判事全員皆ナ其議ニ與ル可キヲ注目ス可シ

高等法院ハ非常特別ノ法廳ニシテ其位置亦控訴院ノ上ニ在リ而シテ事件ノ性質上ヨリシテ高等法院ニ屬スル者ニ附キ控訴院其起訴ヲ爲スニ差支アルヲナシ○尤モ若シ高等法院開廳ノ命ナシ又自カラ訴ヲ起サ、ル時ハ其管轄ス可キ重罪ト雖モ通常裁判所ニ於テ之

ヲ管轄ス可キヲハ既ニ第百條ニ於テ之ヲ説ケリ

第二百九十三條

〔第四百八號〕 控訴院附豫審掛リ判事ニテ一旦豫審ヲ終結シタル時ハ一切ノ事皆ナ始審裁判所ニ於ケルカ如クナル可シ故ニ故障ヲ爲シテ但シ其言渡ニ對シテ控訴スルヲ得ス

豫審掛リ判事ハ豫審終結ノ言渡ヲ爲ス可シ此言渡ニ對シテハ其他ノ豫審處分ニ於ケルカ如ク控訴院ノ會議局ニ故障スルヲ許セリ

〔附言〕 佛法ニ據ルニ斯ル場合ニ於テハ豫審掛判事ハ唯其擔任シタル豫審處分ノ具申ヲ爲スニ過キスシテ其言渡ヲ爲サス故ニ控訴院ニ於テ直ニ其事件ニ附ス可キ繼續如何ヲ判決スルナリ

日本草案ニ於テハ既ニ高等法院ノ事項ニ(第百五條)定メタルカ如ク豫審ノ通常ノ規則ヲ遵守スルヲ撰擇セリ

又故障スルノ場合、法式期限及ヒ之ヲ行フヲ得可キ者モ亦通常ノ規則ニ同シ

訴ヲ起スノ第二ノ場合即チ檢察官ノ干預ナクシテ訴ヲ起シタル場合ニ於テハ其故障ヲ爲シ又ハ他人ノ故障ヲ攻撃スル者ハ檢事長ニ非スシテ此特別ナル場合ニ於テ檢察官ノ職務ヲ任セラレタル控訴院ノ判事タルハ固ヨリナリ

第二百九十四條

〔第四百九號〕 若シ控訴院ニ於テ重罪タルノ證據充分ナリト認メタル時ハ則チ公訴狀ヲ發シテ被告人ヲ重罪審院ニ送付ス可シ然ル時ハ該院ノ職務終結シタル者トス

若シ該院ニテ輕罪又ハ違警罪ニ過キスト思料セシ時ハ被告本人ヲ其刑事局ニ移ス可シ但シ是レ希有ノトトス何トナレハ斯ル場合ニ

於テハ通常ノ訴訟ハ同一ノ障礙ニ遭遇セサル可キヲ以テナリ〇斯ノ如ク履行スルニ於テハ其事件同院ノ管轄ヲ離ル、トナシ但シ其刑事局ノ判決ニ附テハ控訴ヲ許サス

第二百九十五條

〔第四百十號〕 大審院ニ爲ス所ノ上告ハ豫審ト公判トヲ問ハス總テ是等ノ判決ヲ攻撃スル最終ノ上訴ニシテ他ノ上訴ヲ行フタル後始メテ之ヲ行フ可キ者トス
其上告ス可キノ原由及ヒ之ヲ行フ可キ者ノ如何ニ附キ基本トナル可キ諸規則其法式効力並ニ重要ナル適用ハ第四篇第一章ニ至テ之ヲ説明ス可シ

第二百九十六條

〔第四百十一號〕 上告期限ハ總テノ訴訟關係人ニ附キ三日ナリトス

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

但シ其起算ノ點ニ至テハ既ニ故障及ヒ控訴ノ事項(看第二百七十七條及第二百八十二條)ニ掲ケタルト等シク各自ニ附キ異ナル者トス

第二百九十七條

〔第四百十二號〕 法律ニ於テハ上訴ヲ行フ者ノ方ニ「フリユストラトワール」即チ唯ニ法廳ヲシテ誤謬ニ至ラシメ且ツ其判決ヲシテ遷延セシムルノ目的アリト見ユルノ外ハ其上訴ノ妨碍ヲ爲サンヨリハ寧ロ之ヲ保護スルヲ要ス可シ

是ヲ以テ法律ノ獨リ訴訟關係人ニ限ラス其代人ノ上訴ヲ許容セリ又被告人ノ辯護人ハ唯其身分ヲ有スルノミチ以テ上訴ヲ行フノ權アリ○上訴ノ權利ノ「ハ本案ノ裁判ニ對スル上訴ノ事項」ニ於テ法律上之ヲ明言ス(第三百六十條)法律ノ玆ニ之ヲ説明セサル者ハ被告人豫審中共辯護人ヲ有スル「甚ク希ナレハナリ」

上訴ノ請願人又ハ其對手人ヲシテ住所ノ撰擇ヲ爲サシムルノ義務ヲ付シタル「ハ本條ニ指示スル目的ヲ除クノ外別ニ其辯明ヲ要セス

法律ハ被告人ヲシテ此義務ヲ免カレシメタルニ非スト雖モ若シ被告人既ニ繫留セラレタル時ハ其獄舎ニ就テ本人ニ送達ヲ爲ス可ク別ニ其住所ヲ撰擇スルヲ必要トセサルハ固ヨリ當然ノ「ト」トス

第二百九十八條

〔第四百十三號〕 本條ニハ被告人ノ爲メ甚ク有益ナル新則ヲ設ケタリ○歐洲諸國就中佛國ニ於テ上告ノ權利アル旨ト其期限トヲ告知スルハ重罪審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ニ限レリ(佛治第三百七十一條)

日本ニ於テハ此告知法ヲ一般ニシ總テノ處斷及ヒ其處斷ニ對シ行

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

フヲ得可キ一切ノ上訴ニ適用スルヲ要スト思考セリ即チ第三篇
〔第三百六十八條〕ニ之ヲ設定シタリ

豫審處分ノ判決ニ關シテハ總テ皆ナ被告人ノ面前ニテ之ヲ言渡ス
ニ非ス唯其言渡書ヲ送達スルニ過キササルヲ以テ上訴ノ權ノ告知及
ヒ之ヲ爲ス可キ期限ノ告知ハ又此送達書ニ記ス可キナリ

此條例ノ制裁ハ單一ニシテ亦至當トス即チ正當ナル法式ニ循ヒ書
記ヨリ特別ノ告知ヲ爲シ以テ始メノ欠ヲ補フニ非サルヨリハ上訴
ノ權利全ク存在スル者トスルヲ是ナリ

第二百九十九條

〔第四百十四號〕 公判廳ノ事項即チ本條ニ舉示シタル正條ニ就テ上
訴ノ失權ニ對シ之ヲ回復シ得可キ場合ヲ説明ス可シ

第三百條

〔第四百十五號〕 豫審ノ判決ハ猶ホ本案裁判ノコトク既ニ裁判ヲ經
タル事物ノ効力アリ然レモ豫審判事ノ受ケタル證憑ニ就テ審判ヲ
下シタルニ過キス故ニ新タナル證憑ノ生シタルヲ以テ更ニ起訴ス
ルニ就テハ裁判ヲ經タル事物ノ効力ト雖モ之ヲ妨害スルヲナシ
概シテ免訴ノ言渡ハ其基キシ所ノ證憑ヲ至極明瞭ニ示サ、ルヲ以
テ後日新タル證憑ナリトシテ之ヲ差出ス者アル時ハ其眞ニ然ル
ヤ否ヲ確知スルニハ唯訴訟書類ヲ熟讀調査スルノ一方アルノミ○
蓋シ法律上殊更禁止スル所ハ罪ノ名稱ノミヲ變更シテ新タニ事件
ノ訴ヲ爲スニ在リ例之ハ故殺罪ニ附キ免訴ノ言渡アリタル後チ過
失殺ノ罪ニ附キ更ニ訴ヲ起シ又ハ故殺罪ニ附キ免訴ノ言渡ヲ受ケ
タル者アラソニ其後チ此者ハ故意ニ依レル毆打創傷ヲ爲シ人ヲ死
ニ致スノ意ナキモ之カ爲メ遂ニ死ニ致シタルノミノ罪アリトシテ

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

更ニ訴訟ヲ起スカ如キハ皆ナ法律ノ欲セサル所ナリ
 豫審ニ於テハ當初罪名ヲ付シタル事件ニ附キ審判ヲ下スニ過キサ
 ルヲ以テ茲ニ法律ハ被告人ニ付與スルニ獨リ裁判ヲ經タル事物ノ
 効力ニ於ケル保護而已ヲ以テスルニ止マラス異國ノ實驗スル所ニ
 據ルモ濫リニ改メテ爲ス所ノ訴訟ニ對シ人民ノ保障ヲ要スルヲ證
 セリ

然レモ其「新タナル證據」ト稱スル者ハ如何ナル意義ナルヤ之ヲ確定
 スルハ大ニ緊要トス○佛蘭西法典ニハ本條ニ類スル一箇ノ條例(第
 二百四十六條)ヲ設ケ以テ此新證據(第二百四十七條)ノ事ヲ釋義セリ
 即チ之ニ循フチ以テ有益ナリトス

新證據ニ二種アリ第一既ニ被告人ニ責ヲ附シタル事實ノ新タナル
 證據ニシテ即チ新タナル證人、新タナル檢證處分又重大ナル新徵憑
フループ アンヂーヌ

ノ如キ是ナリ第二同一ノ被告人ノ負責ニ於ケル新タナル事實[○]ニシ
シヤルジュ フユ
 テ或ハ重ク或ハ輕ク犯罪ノ性質ヲ變更スル者是ナリ而シテ假令ヒ
 此新タナル事實ハ最初ト同一ノ證人等ノミニテ舉證セル者ト雖モ
 亦此ニ含蓄セル者トス此同一ノ證人トノミニテ舉證セル場合ニ於
 テハ新タナル證據アリトモ云フヲ得可シ何トナレハ假令ヒ其人
 々ハ最初ト異ナルヲナシト雖モ其中立ル所ノ證ハ各其目的ヲ異ニ
 スレハナリ

若シ新タナル事實カ犯罪事件ニ重罪ノ性質ヲ付與セシ時ハ則チ其
 事件最初輕罪トシテ起訴アリシ者ナレハ期滿免除ノ期限ニ變更ア
 ル可シ即チ其事件ハ三年ニ非スシテ十年ノ期限トナル可シ是ヲ以
 テ若シ其三年ノ期滿免除ノ期限既ニ經過シタル時ハ(其中斷ハ免訴
 ノ言渡ニ依テ無効トナリタルヲ以テ)尙ホ新タナル公訴ヲ執行スル

豫審ノ所爲ニ對スル上訴ノ手續

ニ附テハ十年ノ期限ヨリ差引テ殘ル所ノ者アルナリ
 新タニ生シタル證憑ノ査定ハ何レノ場合ニ於テモ控訴院ニ屬スル
 者ニシテ即チ該院ニ於テハ豫審ノ補缺處分ヲ爲ス所ノ法式ヲ以テ
 之ヲ審判ス可シ

此點ニ附キ我草案ハ佛蘭西法典ト異ナルヲ注目ス可シ即チ佛蘭
 西法典ニハ控訴院ニ新タナル證憑ノ調査ヲ附スルハ唯該院ニテ初
 メノ起訴ニ審判ヲ下セシ時ニ限レリ故ニ之ニ反スル時ハ新タナル
 證憑ノ審理ハ豫審判事ニ委テラレタリ然レモ新タナル起訴ヲシテ
 容易ニ過クルニ至ラシメサルカ爲メ吾人ハ被告人ニ最モ有効ナル
 保障ヲ付與セシメテ欲シタリ
 終リニ新タナル起訴ヲ控訴院ニ附スルヲ得可キ者ハ獨リ檢事長ニ
 限レルヲ注目ス可シ民事原告人ハ斯ル起訴ヲ行フヲ得ス蓋シ民

事原告人ハ被告人ニ對シ更ニ訴ヲ起サンカ爲メ初メヨリ重要ナラ
 サル證憑又ハ證人等ヲ出サ、ルノ恐レ有リト雖モ檢察官ニ附テハ
 決シテ斯ノ如キ所爲アル可キノ理アラサルナリ
 然レモ檢察官ヨリ更ニ訴ヲ起スニ附キ既ニ一旦證人氏名目錄ニ掲
 ケタル證人ニシテ且ツ豫審判事ニ於テ其口述ヲ聽クノ要ナシト信
 シタル者ノ口述ヲ新タナル證憑トシテ提出スルモ容易ニ其請求ヲ
 認許ス可カラサルヲ要ス

